東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター

Department of Practical Religious Studies
Graduate School of Arts and Letters
Tohoku University

第８号　2015年11月1日

目次

カフェ・デ・モンク in 高野山（米本智昭）・・ 8-9頁
第７回臨床宗教師研修報告 ・・・・・・・・13-14頁
第７回臨床宗教師研修受講者の声 ・・・・・15-19頁
入棺体験レポート（森田敬史）・・・・・・・・・ 20頁
各地の臨床宗教師会の動向 ・・・・・・・・・ 21-25頁
活動報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26-27頁

臨床宗教師とコミュニティケア
秋田光彦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2-3頁

スピリチュアルケアの「定義」をたずねて
葛西賢太・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4-7頁

臨床宗教師という祈りの実践家養成を
大下大圓　・・・・・・・・・・・・・・・・10-11頁

臨床宗教師のカフェ「そらカフェ」開催報告
大島英子・・・・・・・・・・・・・・・・・11-12頁

量から質へ

東北大学の臨床宗教師研修は、現在進行中の第８回研修の受講者12名を含めて、今年度までに126名の修了者を輩出する見込みです。ここに、龍谷大学実践真宗学研究科、高野山大学臨床宗教教養講座、種智院大学臨床密教センター等の修了者が加わり、臨床宗教師として活動する宗教者の数は今後さらに増えていきます（さらに上智大学大学院には来春から実践宗教学研究科が開設されます）。そして、公立病院を含め、各地に臨床宗教師が常駐する医療・福祉施設が増えつつあります。現状は、臨床宗教師の導入が実験的に試みられている過渡的な段階ですが、この動きが定着・加速していくためには、現場のチーム・ケアにおける臨床宗教師の役割についての高い評価の積み重ねが必要不可欠なものとなるでしょう。すなわち、今後は臨床宗教師の数ではなく、彼らの提供するケアの質が、これまで以上に厳しく問われていくことになります。

そこで求められるのが、現場経験の蓄積とともに、より高い質のケアを保証するための研鑽の継続です。2015年度は、九州（5月）、関西（9月）、北海道東北（12月予定）の各地方でのフォローアップ研修が実施され、軌道に乗り始めています。定期的な会話記録検討会も含め、各地の臨床宗教師会が継続研修の機会を提供する体制が築かれたことは、この３年半の非常に大きな成果だと言えます。「ホーム」での宗教活動の充実ももちろん、臨床宗教師の運動の中では欠かせない両輪の一つですが、是非このような機会を利用して研鑽を続けていただきたいところです。

現行の臨床宗教師研修の実施は、実践宗教学寄附講座の設置予定期間中にあと２回が限度であると考えられます。その後の講座のあり方については、現行の研修期間内だけでは十分とは言えない実習や座学の時間数を確保した一年間のコースの設置など、さまざまな可能性を模索中です。諸方面の皆様のご意見を賜れば幸いです。

2015年11月　実践宗教学寄附講座

関西臨床宗教師フォーラム2015

臨床宗教師と コミュニティケア

浄土宗大蓮寺・應典院住職

秋田光彦

2015年9月27日、大阪市の上智大学大阪サテライトキャンパスにおいて「終末期におけるスピリチュアルケア」をテーマに、「関西臨床宗教師フォーラム2015」が開催されました（23頁参照）。

当日の来場者の中に「劇場型寺院」應典院の代表、秋田光彦さんの姿がありました。地域に開かれたお寺のあり方や、現代のコミュニティにおける宗教の可能性をさまざまな角度から見つめ、実験的な試みを続けて来られた先駆者の眼には、この企画はどのように映ったのでしょうか。ご感想を寄せていただきました。

◆完全アウェーのフォーラム

意外なことに、フロアを埋めた100名の参加者のうち、6割以上が医療・福祉従事者だった。女性が多い。医療と宗教、福祉と宗教という両者がかように親密に、かつ期待を滲ませながら「対話」を試みた「場」を私は知らない。臨床宗教師という主題が、これまで近寄り難かった宗教との糊しろとなっている。そういう印象がした。9月27日に大阪で開催された、関西臨床宗教師フォーラムのことである。

会場の効果もある。どこかのお寺の信徒会館ではなく、上智大学のサテライトキャンパス。主催のひとつは東北大学（実践宗教学寄附講座）だし、協力に上智大学や龍谷大学、種智院大学が名前を連ねる。この日のテーマのひとつは公共空間における宗教の役割だが、大学がその翻訳機能を担っていることが伝わってくる。

フォーラムは３つのパートで進んだ。冒頭の谷山洋三・東北大学准教授の講演では、基本的な臨床宗教師の全体図が述べられ、大河内大博・上智大学グリーフケア研究所研究員の発表では、医療現場での実践に裏打ちされた経験知が披瀝された。この分野を初めて聞く医療関係者も少なくなかったと思うが、宗教観が根底から塗り替えられたのではないか。それほど「布教をしない」臨床宗教師のインパクトは大きい。

「ホームとアウェー」でいえば、この日は宗教者にとって完全アウェーだった。登壇者こそ僧籍にある研究者たちだったが、フロアからは医療者や行政者の意見が相次いだ。肝心の宗教者の影が薄い、といいたいのではない。公共空間（宗教者にとってアウェー）になればなるほど一定、宗教者（布教者）としての自意識を抑制させなくてはならない。自分が何者であるかという問いを、自明のものから置き換える作業なのだろう。そういえば、会場には黒衣や袈裟の姿はひとりも見られなかった。

当日プログラム

谷山洋三（講演）
「生と死に寄り添う臨床宗教師～公共性を担保した宗教者」
大河内大博（実践報告）
「医療・福祉現場における多職種連携のなかの宗教者の可能性」
ディスカッション
谷山洋三・大河内大博・松本峰哲・鍋島直樹

◆宗教者の「個人化」は進むのか

仏教界において、「臨床宗教師」的な動きは、2000年代頃から立ち起こっていた。紙幅の都合で詳細は省くが、葬式仏教が縮小して、「昭和」を知らない世代がSNSを活用して、現場に飛び込んだ。NPOとかソーシャルビジネスとか、新しい公共を巡る事象の影響も大きい。教団の頭越しに、僧侶たちが単身で現場に参加していく。とくに自死やホームレス支援の「臨床」において、30代僧侶の活躍が目立った。それを一気に加速させたものが、3.11であり、それらの延長線上に臨床宗教師が生まれたと私は見ている。臨床宗教師には前史があったのだ。

９月に亡くなった宗教社会学者大村英昭氏は、かつて「臨床仏教」を提唱したことがある（「臨床仏教学のすすめ」）。そこでの臨床とは、僧侶の日常である先祖祭祀の現場を意味していたのだが、それは「現場なき教学、教学なき現場」を問い続けた大村氏らしい設問でもあった。

臨床宗教師はそれとは異なる。臨床宗教師には絶えず「師」という宗教的人格が前提となるわけで、メタな教理として臨床宗教があるわけではない。仏教もキリスト教も新宗教も包摂していくにはロジックで括り取るより、パーソナリティや方法の中で実践的に体系化していくことが求められのだと思う。何より大震災直下において、社会的要請と理解があったのだろう。また、スピリチュアルケアが方法論的に合意の基軸となったことも意義は大きい。

であれば、「宗教者の個人化」が促進されるともいえるのではないか。通常「宗教の個人化」といえば、近代における市民の脱宗教化を意味するのだが、臨床宗教師が投げ

かける個人化とは、宗教者自身の個人化である。自立した宗教者といってもいい。

宗教者は一般に包括的な教団・教区に帰属する。信仰者であればそこに依って立つ本義があるはずなのだが、実態はもたれ合いのムラ組織に近い。それでも昭和の時代までは「相互扶助」が成り立っていたのだが、例えば現在の寺を巡る現状は細分化が甚だしく、究極の末端は寺であるより宗教者個人とならざるを得ない。

だとすると、既存の教団において長く制度化されてきた「（公認の）宗教者養成」とは異なる宗教者を、社会に送り出していくことになるのだろうか。また、その養成を受け持つ宗教大学は、その理念たる宗義を超えて多宗教性、多宗派性をどこまで担保できるのだろうか。さらに、臨床宗教師が宗教の枠を超えて協力しあうことで、なお信仰者自らが依拠する教義そのものにどのような価値を見いだしていけるのか。私にはそのあたりがたいそう興味深い。

◆専門に閉じない地域協働を

今回の発表で私が注目したのは、臨床宗教師の雇用の現状である。すでに講座開始以来3年、114人の修了生を送り出しているが、彼らが、皆故郷の自坊へ戻ったわけではない。

先日の産経新聞にも特養で傾聴僧として活躍する20代の僧侶を紹介していたが、臨床宗教師は末期にある人や死別体験者だけが対象ではない。発表では、彼らが活躍を拡げる全国の緩和ケア病棟や老人福祉施設などが報告されていたが、社会的な「出口」として画期的なことといえる。

高度な専門性を持ちながら、仕事や雇用先に欠き、在野に埋もれる人材は多い。臨床宗教師は、まだまだ社会認知に乏しい。大学側にはまず能力を担保する資格制度が必要だろうし、ブラッシュアップも欠かせない。また、雇用側にもその理解や活用について、お任せではない連携の可能性を掘り下げていかなくてはならない。現状はまだ試行錯誤の段階かもしれないが、そこから新たな宗教者個人の「職能」が現れる。また恒常的な現場だからこそ、医療・福祉との持続的な対話が生まれる。そういう可能性を秘めている。

一方で小さな危惧もおぼえる。フォーラムでも、あるドクターが「（医療者の間では）臨床宗教師という名前が怪しい。変えてはどうか」という趣旨の発言があったが、認識はまだその程度なのだろう。医療、とりわけ病棟型施設には大きなシステムが横たわっていて、果たしてそこへコミットすることだけが臨床宗教師の目的なのだろうか。さらにいえば、臨床宗教師とは医療・福祉が専門領域なのだろうか。

そういう要請や合意が大きいのは理解できるが、臨床宗教師が既存の制度や枠組みに回収されてはつまらない。緩和医療のひとつのパートに陥ってはならないとも思う。

むろん、それも含め公共空間における試行錯誤として理解できるのだが、私が考える臨床宗教師とは、既存のシステムに帰属するだけのものではない。それが紡ぎ出す関係性がふさわしい舞台は、施設より生活の現場である地域である。在宅死が微増傾向にあるが、そういった地域における傾聴や看取り、あるいは死生教育などがこれからの「雇用先」ではないか。地域包括ケアシステムが動き出した今、コミュニティケアこそ活躍の場だと思う。

いや、地域を現場としてとらえるならば、医療福祉の領域に閉じこもることは、わるくいうと臨床宗教師の役割を「特権化」することになる。日本には専門家信仰があって、パターナリズムを生み、ある種の権力の土壌となってきた。臨床宗教師は、むしろ地域に開かれて、医療・福祉をはじめ、教育や環境、あるいは芸術文化などとも横断的につながる「スピリチュアルケアの架橋」の役を担ってほしいと願う。

地域にはドクターやナースにとどまらない、多様な担い手たちがいる。教員、介護者、保育者、さらに家族でケアを担う人。今後臨床宗教師に期待されるのは、そのような地域に偏在する人々とともに「協働」することだ。それを遠ざけてはならない。

付け加えておくと、地域の独自性もできるだけ活かしたほうがいいだろう。フォーラムでも、「関西臨床宗教師フォーラム」と掲げていたが、東北に東北固有の文化があるように、関西には関西ならではの地域文化がある。ゆたかな自然と歴史、花鳥風月を愛でる文化、月命日に家々を巡る僧侶の姿も関西ならではのものだ。死生観とは全国一律のものではなく、そういう地域の物語の中でゆっくりと育まれるものだと思う。

傾聴とかスピリチュアルケアという言葉が、当たり前の関係性として地域の中に溶け込める時――その時こそ、フォーラムで谷山氏が言った「臨床宗教師という言葉がなくなる日」なのだと思う。

（あきた・みつひこ）

日本スピリチュアルケア学会報告

スピリチュアルケアの「定義」をたずねて

宗教情報センター／
上智大学グリーフケア研究所

葛西 賢太

2015年9月11日から13日まで、高野山大学にて、日本スピリチュアルケア学会が行われた。私が特筆したいことは二つ、スピリチュアリティやスピリチュアルケアの「定義」は何か、という連続プレゼンと、総会におけるスピリチュアルケア師の倫理規定案の可決である。いただいたお題は「定義」なので、後者については別のところで書いてみたい。

1．背景と経緯

この学会の目的である「スピリチュアルケア師」の資格認定審査、そしてスピリチュアルケア師の専門性を伝えるためには、スピリチュアルケアとは何であるのかを明確に伝えることばが必要になる。

国内でも、医療や看護の現場で、スピリチュアルケアの定義（一定の枠に収めることでもある）の試みが重ねられている。WHOの緩和ケアの定義などに含まれるスピリチュアルケアへの言及と、それに触発されての議論の積み重ねが参照されている。看護や医療のみならず、福祉、教育、行政（そして、あらためて、宗教）などの文脈において、スピリチュアルケアは一定の役割をもちうると思われる。

日本ではスピリチュアルケアはオプションだが、米国のチャプレンをはじめとする諸事例に思いをはせると必ずしもそうではない。実は、病院や福祉施設、更生施設等の入所者が宗教儀礼にあずかる権利として、スピリチュアルケアを当然必須とみる例が少なくない。高度な医療を必要とする患者を東アジアに広範囲に求めるような病院の場合にもそれが求められる。

このような経緯から、海外での「定義」をめぐる議論も参照し、学会として「定義」を発信する時期ではないかと理事会で検討された（同学会ニューズレター12号、13号）。そこで、4人の提起者を学会が指定し、あわせ会員からも提起者を公募した。総勢9人が自案を事前提示、私もそのひとりだった。抄録には背景や趣旨がおさめられた。当日は抄録と任意の資料のほか、9人の「定義」案を比較する一覧表が配付された。当日は9人のあいだでの意見交換の時間はとらず、翌日、重鎮の先生方によるコメントをシンポジウム形式で検討することとなった。

2．スピリチュアリティ、スピリチュアルケアの「定義」案

まずは「定義」の一覧表を見ていただこう**【次ページ】**。下線は私・葛西による。全員を平等に紹介することは不可能なので、私が共感した方や共感した点、そして私自身の提起したことを整理しておきたい。

読み比べて最初の印象は、相容れない着眼点からの定義が並んでいるなあ、というものだ。もちろん、相容れないからダメだというのではなく、人間を全人的に捉えるということの広がりがあらわれていると考えられる。

たとえば、鎌田氏とまどか氏の「定義」は、狭い意味での「学術的」ではないかも知れないが、日本語のもつ響き、ことだまや、身体感覚に根ざす言語を尊重し直観（直感ではない！）をそれぞれ重んじるものだ。鎌田氏は身心変容をもたらす諸実践でひとつひとつたしかめることからしぼりだされたことばである。この表で「定義」という形で提出されたものよりも、鎌田氏自身のことば「『スピリチュアルケア』とは自己探求と対人援助の両者が分かちがたく結びついている」のほうが、氏の考えを適切に伝えていると思われる。また、まどか氏はことだまの音声の深義を取り出そうとし、日本語の音のひとつひとつに宇宙的な真理とのつながりを見いだすような、ルドルフ・シュタイナーを思わせる、またマントラ論のような提起である。まどか氏はこの議論でライフサイエンスの再構築を志しておられるという。両氏の提起のもつ味わいや広がりが失われてしまうのを怖れるので、他の提起との比較はあえて行わない。だが、重要な提起であることをここで強調しておきたい。

a. 山崎章郎氏

スピリチュアルケアを、山崎氏は「どのような状況においても、自己の在り様を肯定し、人間らしく、自分らしく生きることが出来るように支援すること」と定義する。

この「どのような状況」（においても）はスピリチュアルペインを想定していると考えられる。「緩和ケアは全人的苦痛に対するケアであるが、その全人的苦痛を構成する身体的苦痛は、身体があるから生じるのであり、心理的苦痛は心理があるから、そして、社会的苦痛は社会があるから生じる」とすれば「スピリチュアルペインはスピリチュアリティがあるから生じる」と考えられる、とみる（抄録）。そして、スピリチュアリティをめぐる不具合（実際にはこれが「どのような状況においても」の中身なので、不具合というにはとても深刻な状態）を手当てするのがスピリチュアルケアであると考える。「その状況における自己と他者との関係のありようが肯定できていない状態から生じる苦痛＝人間らしく、自分らしく生きることができていない状態から生じる苦痛」に対し、依り所となりうる他者として自分を差し出すことによってケアが成り立ちうる、とみる。

注意すべきこととして、山崎氏がスピリチュアリティを「全ての人に、生得的に備わった力」であることを強調していること、つまり、「依り所となる他者」だけで実現するものではなく、修正可能な「不具合」を調整する自己の働きに山崎氏は信頼をおいていること、を指摘しておきたい。

なお、山崎氏は、村田久行氏が、終末期がん患者の直面するさまざまなスピリチュアルペインを「まとめて」、「自己の存在と意味の消失から生じる苦痛」と帰納的に捉えるありかた、そして彼の読者たちがスピリチュアリティの深義を掘り下げずに、「このようにいわれているから」と、緩和ケアの現場で村田氏の「定義」が十分な吟味を経ずに使われていることに疑問を呈している。

b. 谷山洋三氏

東北大学の教員であり浄土真宗の僧侶でもある谷山氏が今回強調するのは、「宗教者の視点」である。スピリチュアルケアの議論では、病院・医療の文脈の存在感が大きい。それゆえに、「マイナスからプラスへ」（病気から健康へ）という、スピリチュアルケアの本来の意義を矮小化する議論になりがちである。問題の解決だけでなく、「必ずしもペインを前提としない」向上心を尊重する文脈が宗教には（宗教にも）あり、それに適切に応じるケアを見落としてはならないと考える。

谷山氏は、スピリチュアルケアが他者によるだけでなく「セルフケア」でもありうることも強調する。これはケアの与え手自身のセルフケアが問われている（無条件に相手に捧げる宗教的奉仕、というのは不健全かも知れない）ということでもあり、また、向上心と結びついた日常的なセルフケアと深く関わるということでもあろう。

谷山氏はさらに「ケア対象者が信仰を求めている場合とそうでない場合」とを区別しての宗教的ケアを「宗教的資源の活用」と位置づける。

この議論は、宗教者と非宗教者が接する領域で生じる好悪諸反応を視野に入れたもので、私自身の経験と通じるものが多かった。

c. 小西達也氏

まず小西氏のシンプルな「定義」を見ていただきたい。これまでさまざまな「定義」を自身で試みてきた積み重ねの上で、氏はあえて、「定義を統一することの困難」を今回の話題としたい、と述べた。そして、スピリチュアリティとスピリチュアルケアの今回の「定義」は限定的なものである、と遠慮がちに示した。スピリチュアリティは「『いのち』の『はたらき』」と、そしてスピリチュアルケアは「『いのち』への目覚めと『いのち』の表現のサポート」と、氏により定義されている。9人の論者のうち、小西氏の「定義」は最も短くて心にとどめやすく、なおかつ平易なことばでつむがれている、広く活用可能なものであることを私は強調したい。多くの多様な担い手が用いうる定義というものがどのようであるべきなのか、それを考えるためのモデルがここに示されていると私には思われたのである。

発表の中では、スピリチュアルケアの定義が難航している事情として、立場の異なるさまざまな「当事者」が用いうるようにすることの困難を氏は列挙する。私たちの人間観はきわめて多様である。そして、私たちは生の本質を十分に深めていない（Spiritual Well-Being指標のような試みもあるが、このような特定状態の実現を目指すことは、主体

提起者	スピリチュアリティとはなにか	スピリチュアルケアとはなにか
山崎章郎	スピリチュアリティとは「どのような状況でも、人間らしく、自分らしく生きるために、全ての人に、生得的に備わった力である」	スピリチュアルケアとは「スピリチュアリティの力が適切に発揮できるように支援し、どのような状況においても、自己の在り様を肯定し、人間らしく、自分らしく生きることが出来るように支援すること」
谷山洋三	自身の超感覚的な体験を意味づける機能	自身の超感覚的な体験を意味づける機能が働くことによって、自分の支えとなるものを（再）確認・（再）発見し、さらに生きる力を獲得・確認する援助もしくはセルフケア
鎌田東二	全体性（まるごと）、根源性（ねっこ）、深化・変容（ふかまり）をもたらす生の羅針盤（いのちのコンパス）	嘘をつけない自分や他者と向き合うプロセス。「体は嘘をつかない。だが心は嘘をつく。そして魂は嘘をつけない。」あいだにあるはたらきを感知しつつ、まるごとの素の自分を見つめ、いのちの帰趨に向い合うこと。
小西達也	「いのち」の「はたらき」	「いのち」への目覚めと『いのち』の表現のサポート
小友進	死の痛みの超越は①「人間社会を生きる価値観からの解放」と、②「新たな価値観の獲得」によってもたらされる。スピリチュアリティとは②の拠り所となる人間を超えるもの（超越者）との関係を構築する生得的能力をいう。	死の痛みからの超越を目的とするケア
葛西賢太	個人・人間および人間による知・実践の限界を認識するゆえに、個人・人間を超えた外部が示唆・参照されること。	観察・傾聴・手技・儀礼・同席・内省・共感などによる、身体・心理・社会の一側面には還元しえぬ、支援実践 付記：緩和ケアや宗教的ケアに限定されない。また、緩和ケアによって生じた課題や、宗教的罪責感などの問題をも取り扱う。
清田直人	スピリチュアリティとは、不本意な現状（危機など）において受け入れがたい自己を表面化させ、その自己を受容すべく感性や理性に働きかけ、他者との関わりにおいて存在意義や価値を見出させていく機能である。	スピリチュアルケアとは、他者承認を通して自己受容がなされていくことを援助する関わりである。
松本行弘		生きることに課題を持つ人が、自己緩和力を自ら発揮して、安らぎを得られるよう寄り添うこと。
まどかアッセマ庸代	ひとの最も大切な生命存在の芯。「霊（鈴ノ音）性」 physical/mental/spiritualなアプローチを段階的にもたらす近代医科学の限界から未来課題の術語。 宗派・国籍を超え多文化圏でお互いの生死やいのちが芯に問われる場でその本質・神髄に出会う。	全人的医療や人生を通して、お互いをいのちとして「大切にしあう」ケア。 公私共に、いのちの学術・芸術・文化を基盤とする。

的なプロセスであるケアと相容れるのだろうか、という疑問が提示される）。

小西氏の立場は単なる医療批判でもない。医療の専門性と、「生死のリアリティ」に接する現場の重みを踏まえ、「皮相的な人間観察」だけによらないよう警告する。そして、人間観・世界観の多様性と、複数の専門性、当事者とケア提供者の視点などを包含すると、統一的な「定義」を見いだすことは難しいのではないか、としつつも、それらを踏まえた思慮深い議論をする意義は否定しない。

私にとっては、小西氏の議論で、スピリチュアルケアをめぐっての「実際のありかた」と「どうあるべきかのビジョン」（古い言い方だと、ドイツ語のSeinとSollen）の両方に配慮されていたことが印象深かった。また、統一的定義をあげることの難しさを私も感じており、この点でも首肯できた。

d. 小友進氏

小友氏からは、一般公募の提起者となる。氏の定義は「死の痛みからの超越」を核におくシンプルなものである。薬剤師であり、特定宗教によらないボランティアの傾聴者である氏の発表は、生物学の生命論に深く根ざしたものであった。抄録から、私は、実証主義、科学至上主義的な話を勝手に予想したのだが、そうではなかった！

生物学からは、「死の痛み」を避けがたいことが確認される。ところが、氏の緩和ケア病棟での傾聴実践では、同じ状態でも死の痛みを「超越」する人とそうでない人がいる。そのちがいは何か！？という問いを氏は投げかける。生物学的生命論によってたつからこそ、「超越」が浮き彫りになる。

人間を「超越」する存在と向き合うことによって人間はどのような存在たりうるのかと小友氏は問う。氏の提起を聞きながら、私は想像を膨らませた。小友氏は「神仏」のようなものだけでなく、一箇の生命を超えて種の存在を見まもる「（利己的な）遺伝子」さえもひそかに対置しているのではないか、と私には感じられた。一箇の生命を超える視点をどこにもとめるか、深い示唆をはらむ真摯な提起であった。

e.清田直人氏

栄光病院でチャプレンとして奉職する清田氏は、自己の理想像・あるべき姿と一致しない現実を、人生の危機ととらえる。この危機は当事者や周囲のスピリチュアリティを覚醒させる。またこの危機に、ケアの与え手は他者として受容的に「関わり（レスポンス）」をもつ。これがスピリチュアルケアであると氏は述べる。

上述のような大きな「危機」ばかりではなく、理想との小さなズレを私たちは日々味わっている。高木慶子氏は「危機においてのみスピリチュアリティが覚醒するとはいえないのでは」と問いかけた。この問いをめぐるやりとりは、「小さな危機」に対する私たちの反応や対応をどう受け止めるかについて、私が提起したことと重なる（後述）。

f. 松本行弘氏

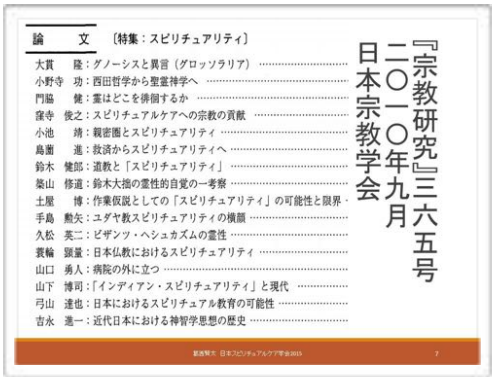
氏は、人が悲しむには「悲しむ力」（悲しみながら自己調整する力、と、説明しておきたい）が必要で、それを氏は「自己緩和力」と呼んだ。氏はこれを「自己治癒力」や「自然治癒力」のいずれとも異なるとし、「不安や恐れといった感情を自ら穏やかに保つ力」とし、苦しんでいる人と「共に居る」ことで「力を貸す」ことができると考える。会場からはこの自己緩和力とレジリエンス概念との比較についての問いもあった。WHOの健康定義において、身体・心理・社会に加えてスピリチュアルな次元が検討されたことに触発されながら、ケアの担い手としてのあり方についても言及する。

g. スピリチュアリティ概念をめぐる思い入れを自覚する

私の提起は、スピリチュアリティの「定義」を考えるうえで配慮すべき点についてコメントするものとなった。

私自身の定義では、あえて宗教的超越的な存在への言及を省いている。上智大学はイエズス会を母体とするカトリック系の大学だが、（中核的価値観を堅持しつつ）カトリックの枠を超えた超宗派的な実践をグリーフケア研究所では志していることが、その背景にある。超越的存在をおかなくても、人間が生の限界に直面するときに要請される外側からの支援、あるいはひとりの力の限界に直面するときに要請される他者による支援。身体・心理・社会の次元にはおさまらないものが要請される、この点に注目するとき、「スピリチュアルケア」は必ずしも狭い意味での「宗教的」なものでなくてもよい。だが実は神学者ルドルフ・オットーの『聖なるもの』にみるように、人間の限界に直面する状況は、聖なるものの顕現を説明するモデルとしても用いられている。

そしてこの「人間の限界」は大きなものでなくともよい。例として仏教の「苦」概念をめぐる誤解について言及してみよう。「生老病死」などの語彙から連想される仏教における「苦」の概念は、老苦、病苦、死苦などの「大きな」苦しみとみられがちであるが、実は苦をさすパーリ語のdukkhaの原義は、「大きな」苦だけでなく日常的な不快感も含む広がりをもつ。自分の本来の理想と、現実生活とのあいだにズレがあって悩んでいるなどといったことも、死を前にした苦と同じではないが、立派な「苦dukkha」なのである。私は「スピリチュアルケア」が、緩和ケアやターミナルケアの文脈だけに限定されないほうがよいと考えているが、それは、大きな苦の手当てにはこのような「小さな苦」への手当てが少なからぬ意味を持つと思われるからである。


『宗教研究』三六五号
二〇一〇年九月
日本宗教学会

論　文　〔特集：スピリチュアリティ〕

大貫　隆：グノーシスと異音（グロッソラリア）
小野寺　功：西田哲学から聖霊神学へ
門脇　健：霊はどこを徘徊するか
窪寺　俊之：スピリチュアルケアへの宗教の貢献
小池　靖：親密圏とスピリチュアリティ
島薗　進：救済からスピリチュアリティへ
鈴木　健郎：道教と「スピリチュアリティ」
築山　修道：鈴木大拙の霊性的自覚の一考察
土屋　博：作業仮説としての「スピリチュアリティ」の可能性と限界
手島　勲矢：ユダヤ教スピリチュアリティの横顔
久松　英二：ビザンツ・ヘシュカズムの霊性
蓑輪　顕量：日本仏教におけるスピリチュアリティ
山口　勇人：病院の外に立つ
山下　博司：「インディアン・スピリチュアリティ」と現代
弓山　達也：日本におけるスピリチュアル教育の可能性
吉永　進一：近代日本における神智学思想の歴史

スピリチュアリティという概念を整理することそのものに難しさがある。この語は、（とくに宗教者は）さまざまな思い入れをもって用いられるからだ。だから想像力を膨らませるとともに、事実にもとづいた確認をしてみたい。たとえば、日本宗教学会の学会誌『宗教研究』365号は「スピリチュアリティ」特集なのだが、掲載論文のリストをスクリーンに映して皆さんにはその多様さを感じていただいた。あるいはスピリチュアリティの類義語はあるか？マインドフルネス（仏教瞑想などの立場から）、幸福（ポジティブ心理学における）、平安（依存症の苦しみから解き放たれた「平安さSerenity」）などの語とは、どのような共通点を持ち、どう異なるか？　WHOが試みるように、この概念を日本の文脈において標準化するとしたら？などと問うた。

私は新聞・雑誌の記事と投書欄を、2003年から20年遡って渉猟し比較した。新聞・雑誌の一般記事を書くのはプロの書き手（松任谷由実から教育活動家まで実例を引用した）であり、スピリチュアリティということばを意図的に、新鮮さがまだのこるレトリックとして使うことがある。けれども投書欄ではスピリチュアリティということばの用例はきわめて少なく、このことから、ふつうの人が日常語として使うことは少ないのだとわかる。2015年の現在でも、ふつうの人は「スピリチュアル」はかろうじて見聞きすることがあっても、「スピリチュアリティ」の用法は少ないのではないかと推測される（葛西2003）。

WHOの健康定義改訂の試みについても、思い込みや誤解がしばしばみられる。私はWHO憲章における健康定義改訂の試み、会議の様子やその基盤となった質的調査などについて、WHOに代表としておもむいた東京理科大（当時）の田崎美弥子氏にインタビューして資料提供を受けた。調査や討議は真摯で徹底したものであったし、WHOが、けっして単純な一枚岩ではなく、スピリチュアリティの捉え方についても多様なあり方を共存させる努力が払われてきたことが確かめられた（葛西2003）。

この学会のマジョリティの宗教のあり方が、「定義」に反映される危険にも留意する必要がある。この学会で日本国内よりもクリスチャン濃度が濃いことの自覚なしに、たとえばイスラームのスピリチュアリティなどは論じられないだろう。また、犯罪の被害者のケアは当然だが、実は加害者もその生育過程においてしばしば凄惨な体験を経ていることを見落としがちである。スピリチュアリティは人間の完全さよりも不完全さの受容としばしばともにあることも（Kurtz & Ketcham 1993）罪責感の手当てに欠かせない。

3. 定義案をめぐってのシンポジウム

「定義」をめぐる提起を受けて、翌日は、島薗進、柏木哲夫、窪寺俊之、滝口俊子の4氏が登壇し、伊藤高章氏が司会するシンポジウムが行われた。まずは前日の9発表を聞いた参加者へのアンケートの速報。ついで司会の伊藤氏は、登壇した4氏に対して、（1）昨日の問題提起へのコメント、（2）スピリチュアリティを日本語で表現できないか、また、（3）討議内容を三つのキーワードに表現するとしたら、と求めた。4氏と会場も含めた討議内容は多様であった。たとえば、(a)私たちのスピリチュアルケアが大きく依拠しているチャプレンモデルの限界を乗り越えていこうという呼びかけ、(b)いのちのいたみやつながりだけでなくいのちのめぐみ（感謝）もスピリチュアリティの重要な要素ではないかという問いかけ、(b)スピリチュアリティの暗い面（反社会的または非社会的な面）にも向き合っていくべきという確認、などがなされた。

二日間の討議の趣旨である、現場から切望される定義、という原点に戻って、山崎氏と柏木氏の語りをここに記して締めくくりたい。山崎氏は、高齢化社会の更なる進展と、ターミナルケアを短期にしようという趨勢の中で、いかにして適切なケアを提供しうるか、それを正確に表現し、導きとなることばがあり、それをもとに適切なトレーニングが展開されることが急務だと強調した。また柏木氏は、聖クリストファー病院における、スピリチュアルペイン対応の要件を引き合いに出し、ユーモアも含めた人間的な諸能力を動員するために私たちが何をしうるかを問うた。

「定義」構築の取り組みは今後も同学会で重ねられる。その困難や危険性をも自覚しつつ、議論を通して多くの事例が突き合わされることで、「定義」以外にも建設的な発見があると期待している。

（かさい・けんた）

参考文献

Kurtz, Ernest and Katherine Ketcham 1993 *The Spirituality of Imperfection: Storytelling and the Search for Meaning*, Bantam
葛西賢太　2003　「『スピリチュアリティ』を使う人々—普及の試みと標準化の試みをめぐって」、湯浅泰雄編『スピリチュアリティの現在』人文書院。
日本スピリチュアルケア学会　2015 『2015年度 第8回　日本スピリチュアルケア学会学術大会 プログラム・抄録集』
日本宗教学会　2010　『宗教研究』365号、2010年9月。

レポート

カフェ・デ・モンク in 高野山

米本 智昭

テーブルにつき、暫く沈黙の後、四十代半ばであろう女性は私にこう語り始めた。

「数年前まで、私は外科に勤務していたのですが、必死に頑張って、頑張って、頑張って、それでも報われない時が何度もあって、心のどこかではもう頑張らなくてもいいんじゃないのかって思っていました。患者さんを苦しめているだけなのかもしれないって思いました…。」

その華奢な左手が持つ紙コップは小刻みに揺れていた。

日常生活でこのような告白を聴く事はそう多くないでしょう。ましてや初めて会ったばかりの人に語る話題ではありません。

しかし、ここは傾聴移動喫茶カフェ・デ・モンクのテントの中です。スタッフは全て宗教者。今回の開催地は、聖地高野山でした。

これは臨床宗教師第五期研修を受講した新田忍澄師の発案です。今年は高野山開創千二百年という記念の年に当たるので、今年カフェ・デ・モンクをしたいとのことでした。

また、「日本スピリチュアルケア学会学術大会」が九月十一日と十二日に行われる事がわかり、学会の実行委員長である大下大圓先生や関係各所にその旨を伝えて、快諾されたことによります。

スタッフは、この活動を牽引されてきた金田諦応老師、通称ガンジー金田マスターをはじめ、私達をいつも助けてくださる石巻の高福寺吉田裕昭住職御夫妻、美里町玄松院の三浦正恵師も駆けつけて下さいました。そして臨床宗教師研修の仲間達が北海道、東北、関西、九州と計十五名程集まりました。

高野山という所は神秘的なものを内包している聖地です。勿論、私が高野山真言宗の僧侶であるということで贔屓目があるでしょうが、都会の喧騒から離れた非日常の空間であることには違いありません。

非日常の聖地が舞台ですからこういう事も起こります。臨床宗教師の仲間、糸山さんはこのカフェデモンクの為に九州から大阪に入り、「高野山行き」の終電に乗車しました。長期移動の疲れからか、彼は熟睡してしまいます。

そして何か金属音に反応し、目を覚まして愕然としました。なんと周りは真っ暗なのです。乗車しているのは自分一人。すると…

「ちりんちりぃん…。極楽…極楽…。」

そんな音が聞こえてきました。

「んんん…まさか？俺は死んでしまったのか…南無阿弥陀仏…」

お念仏をして車外に飛び出ると、高野山の麓、終点「極楽橋」に着いていました。

「生きている…良かった。なんだ、ちりぃんちりんというのは風鈴だったのか…」

彼が寝ていて降りてこない事に駅員が気づかず、消灯してしまったというのがオチであったのですが、冗談ではなく本当に怖かったようです。

ただ、危機的状況ではつい「南無阿弥陀仏」と口に出るというところがさすが浄土真宗のお坊さんなのだと私はいたく関心しました。

そういえば、鎌倉期には高野山にも念仏が溢れていたそうです。また、山内の寺院には日蓮上人や、親鸞聖人にゆかりのあるお寺がありますし、景教という古代キリスト教系の方の為の供養塔もあります。

ご存知のように、臨床宗教師研修は「他宗教との連携」をとても大切にします。まさしくこの高野山も様々な思想を引き受けて、それらの祈りの力によって一千二百年間もの間、山が存続してきたのですから、此処の地でカフェデモンクをすることには大変意義があるのだと思いました。

九月十一日、初日は成福院という高野山内塔頭寺院の境内にてカフェデモンクを開きました。点てたばかりの抹茶や珈琲の匂いが高野山を包むお香の匂いと混ざり、それが妙に心地よかったのを覚えています。来られる方は少なかったですが、お客さんの数が少ないと、我々もじっくりと耳を傾けることが出来ます。

九月十二日は学会が開催される高野山大学キャンパス内に場所を移動しました。大会実行委員長大下大圓師のアナウンスのお蔭もあり、飲物とお菓子を待つ方の行列が出来るほどの大盛況でした。そして、来られた方はたくさんの胸の内を吐露されていきました。

残っているお菓子や飲み物から逆算しますと、この二日間で約五百人の方がお客さんとして来られたことがわかりました。とんでもない数であることは言うまでもありません。

嵐のような二日間が終わり、宿坊のお風呂でマスターにご一緒しますと

「カフェデモンク史上、一番疲れたね…」

と、呟かれていました。しかしマスターはすぐに

「彼らは本当に悩んでいるよ。真剣に悩んでいるよ。あぁいう人達が本当に患者さんの事を思いながら、悩みながらもがいているんだ。そこに私達が寄り添って、一緒に悩むんですよ。」

そう続けられました。

そういえば、冒頭に紹介した元外科医の方とは最後にこんなやりとりがありました。

「頑張ったのちに、あなた達みたいな方がいてくれるなら、本当に有り難いです。最後に祈ってくれませんか」

「私の方こそ、お会いできて光栄です。お祈りさせてください。どんな事をお祈りされたいですか」

「私の母がもう少し長生きができるようにと祈ってください…。あ、関東の大雨の被害が広がらないように祈ってください…。あ、やっぱり私のことも…。いや、欲張りですよね（笑）」

「ご自身のこともお祈りしますから、言って下さって良いですよ。これは誰にも言わないですから。」

「そうですよね。実は、私は…」

普段は明かすことが出来ない心の内に私達が寄り添わせて頂く時間。

傾聴のち祈り。祈りのち傾聴。
モンクに「文句」の一つも言いながら、
ちょっと一息つきませんか？
お坊さんも、あなたの「文句」を聴きながら
一緒に「悶苦」します。

今回の高野山カフェデモンクは新たな可能性と、新たな臨床の場を私達に示してくれた、大変実りある時間でした。関係者の皆様、誠に有難う御座いました。

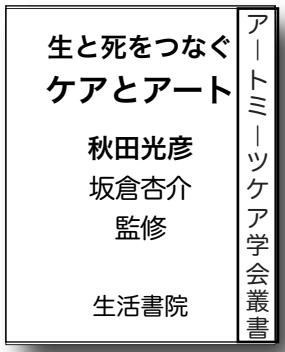
合掌 九拝
米本智昭

ご紹介

『講座スピリチュアル学
第1巻スピリチュアルケア』

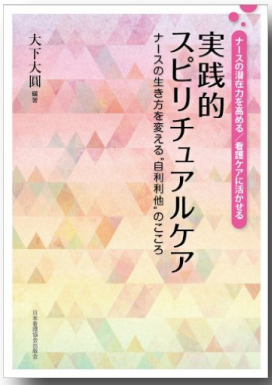
鎌田東二編・著
伊藤高章、高木慶子、島薗進、窪寺俊之、谷山洋三、カール・ベッカー、井上ウィマラ、大下大圓、滝口俊子

ビイング・ネット・プレス
1800円



『生と死をつなぐケアとアート』
秋田光彦／坂倉杏介 監修
11月10日刊行予定
生活書院　　予価2000円
（表紙デザインは未定）

『仏教心理学キーワード事典』
井上ウィマラ・加藤博己・
葛西賢太(編)
春秋社　4104円



『実践的スピリチュアルケア
―ナースの生き方を変える“自利利他”のこころ』
大下大圓（編）
日本看護協会出版会
2484円

『ミャンマーで尼になりました』
天野和公
イーストプレス
1080円

高野山大学大学院臨床宗教教養講座設立の意義と指針

臨床宗教師という祈りの実践家養成を

高野山大学客員教授
大下大圓

高野山大学大学院臨床宗教教養講座は2015年9月1日から、16名の受講生を集めて東京高野山別院と六本木ハリウッド大学院大学の施設を活用して開始しました。

高野山大学では、2006年に、日本で初めて大学教育でスピリチュアルケア学科を新設しました。学部生募集でしたが若年層での課題意識が乏しく、学生がそれほど集まらず、いったんは募集停止をしていました。しかし2014年4月から、大阪のサテライト校でスピリチュアルケアコースを再開して、医療系を中心に社会人が多く参加しています。

2011年の東日本大震災と原発事故は、さまざまな人間観の価値意識の変容をもたらし、
多くの人々は今日の科学文明が絶対的なものではないことを実感しました。同時にこの災害や事故は、人間のいのちや生き方がどうあるべきかを改めて根本から考える機会となり、単なる物質的な営みだけではない生物、人間の存在意義と価値を現代人に問いかけることにもなりました。

2012年に東北大学では「実践宗教学寄付講座」を創設し、臨床宗教師の養成プログラムを開始しました。このことが宗教系私立大学において独自の臨床宗教・スピリチュアルケアの学びを提供する動きに発展していきました。同時に2014年には大学間で情報交流などを目的とした「臨床宗教教育ネットワーク」も構築され「日本臨床宗教師会」への組織化へ発展が期待されています。

現代医療の現場では、日本ホスピス緩和ケア協会の2011年度の調査によれば、協会に属している213 施設中36 施設で61　名の宗教家が活動していると報告している緩和ケア病棟遺族を対象にした調査において、遺族の約半数が「牧師・僧侶・チャプレンなどの宗教家が訪問する」ことを有用と考え、全ての宗教的ケアの中で「牧師・僧侶・チャプレンなどの宗教家に会う」ことが最も高い有用性評価を得ているとあります。またその後の研究では14施設の緩和ケア病棟で活動する宗教家は礼拝などの宗教的支援だけでなく、チームの一員として多様な活動を行っており、今後のチーム医療の在り方に臨床での宗教家の存在が有用であることが報告されています。（村瀬正光、2013)

日本スピリチュアルケア学会では2013年には、学会認定の「スピリチュアルケア師」（認定、専門、指導の三種）認定制度が樹立し、2014年には総数170名を越えました。今後、さらなる多職種連携が推進される中、資格認定の動きは、施設や在宅での臨床宗教やスピリチュアルケアの専門職導入に、はずみがついたといえます。

高野山大学では東北大学実践宗教学講座担当者と綿密な会合を重ねて、今後の連携や情報交流を諮りつつ、東京都内に大学院サテライトとして「臨床宗教教養講座」を設置する動きとなりました。

臨床宗教師めざし16人

高野山大、東京で講座開講

高野山東京別院で行われた開講式。藤田学長は受講生の今後に期待を寄せた

東京都港区の高野山真言宗高野山東京別院遍照殿で8月28日、高野山大臨床宗教教養講座の開講式が開かれた。同宗の僧侶をはじめ、寺族や他宗の僧侶ら16人が受講。講義や実習などで1年かけて臨床宗教師を目指す。

鈴木英全・同別院主監を導師に法楽が営まれ、藤田光寛・高野山大学長が「現代社会では医療や看護、福祉、教育などで心のケアの必要性が増しており、社会的要請に応えるためにこの講座を開講した。様々な分野で活躍、貢献できる人材となってほしい」と挨拶した。

講座では宗教間対話や仏教文化、死生学などの座学と、病院・福祉施設等での実習を行う。臨床宗教師だけではなく、教師資格を持たない受講者は、スピリチュアルケア

中外日報
（9月2日）

この講座はこれまでの通信制大学院の実績を踏まえつつ、「社会人キャリアコース」の位置づけとして、東北大学とほぼ同じプログラムを開講しつつ、宗教学、密教学、仏教学の専門的１科目平均20時間内を１単位として履修するプログラムを作成しました。今後は高野山大学大学院修士課程（通信課程）とも連動して、単位の互換性が諮られ、修士単位を本学で履修することによって、修士課程の修了もできるように工夫します。すべての単位を履修して修了試験に合格すると、日本臨床宗教師資格認定委員会-整備中）から臨床宗教師の認定を取得することができます。また日

本スピリチュアルケア学会の「認定、専門のスピリチュアルケア師」も取得できます。

その科目は「スピリチュアルケア概論Ⅰ、Ⅱ、スピリチュアルケア演習、仏教学、密教学、仏教芸術学演習(仏画・マンダラ制作)、密教学演習(臨床瞑想法)、宗教学、宗教人類学、死生学、生命倫理学、宗教間対話、臨床心理学、相談心理学、宗教心理学、社会福祉学、高齢者福祉実習、宗教間対話実習、臨床宗教学実習ⅠⅡ(臨地実習、被災地実習)、臨床宗教学実習指導ⅠⅡ(個人、グループスーパーヴィジョン)」などです。

今年の学生さんは僧侶、尼僧、看護師、カウンセラー、元公務員、会社員などです。教養講座なので、僧侶が全体の半分くらいで、さまざまな職種の方と一緒にまなぶ「多職種連携」のワークを行いやすくなっています。実習は室内でのグループワークをはじめとして、被災地などの現場実習、医療福祉施設での臨地実習などが予定されています。実習施設としては、「東京都立豊島病院（緩和ケア病棟）、医療法人普門院診療所（老健施設）、特別養護老人ホームすどの杜（特養老、デイケアハウス）、名古屋掖済会病院（緩和ケア病棟）、彦根市立病院（緩和ケア病棟）、関中央病院（老健病棟、グループホーム）、あそかビハーラ病院（緩和ケア病棟）、NPO法人ビハーラ２１（介護施設、デイサービス）」などです（交渉中もあります）。

宗教間対話実習としては、鎌倉黙想の家（イエズス会日本殉教者修道会）や都内のモスク寺院、新宗教施設などが予定されています。　　（おおした・だいえん）

ユニフォームを準備中です。
高野山の受講生の中から「ユニフォーム委員会」が立ち上がり、医療や福祉の現場で臨床宗教師（スピリチュアルケア師）であることがわかるような実習用のユニフォームを作ることになりました。すでにデザインが決定し（色は辛子色です）、10月中に見本が完成します。他の臨床宗教師の方々にもおすすめしたいので、ご希望の方は大下までお問い合わせください。

臨床宗教師のカフェ
「そらカフェ」開催報告

上尾中央総合病院
緩和ケア病棟看護科長
大島 英子

上尾中央総合病院　緩和ケア病棟では、患者さん・ご家族に対するこころのケアの一貫として臨床宗教師のカフェ「そらカフェ」の開催を今年の6月よりスタート致しました。臨床宗教師として当院の緩和ケア病棟でボランティア活動して下さっている1期生高橋悦堂さんと6期生天野和公さんと共に、臨床宗教師と医療チーム、ボランティアが協働して提供できる企画を検討し誕生しました。

そらカフェの由来は、B館最上階（13階）にある病棟ラウンジから見える空がどこまでも広く続ききれいであったこと、雨の日も風の日も曇りの日も晴れの日も空があるように、辛いときも悲しいときも苦しいときも楽しいときも、わたし達は患者さん・ご家族と共にいてこころに寄り添うことが出来たらという願いを込めて名付けました。

初回はティーサービスボランティアとハープ演奏ボランティアと協働で開催しました。ハープ演奏をBGMにティーサービスの準備を始め、注文を頂いた珈琲や紅茶、かき氷を病室に届けて頂きました。ラウンジにお越し下さった患者さんやご家族の傍らでハープ演奏を一緒に聴き、ご家族の辛い気持ちに耳を傾けて頂きました。

ある会話が出来ない患者さんは臨床宗教師が関わる中で自然と手を合わせ祈りの時を持たれた光景もありました。

2回目は看護師が企画したケーキバイキングの茶話会とそらカフェをドッキングしました。看護師の他に管理栄養士と元パテシェである調理師、臨床心理士と協働で開催しました。実習中であった第7回臨床宗教師研修生にも参加して頂きました。

がん終末期の患者さんはたくさん召し上がることは出来ませんが、一口サイズの色とりどりのケーキを選ぶ楽しみ、味わう楽しみ、共に集う楽しみを感じて頂きました。

がん終末期の患者さんは死を目の前にして、たくさんの痛みや苦しみ、実存的な苦悩を抱えています。またご家族も大切な家族を失う悲嘆があります。

臨床宗教師は死を超えた先を見つめつつ、目の前の患者さんとご家族のこころの声に耳を澄まし、こころに寄り添って下さいます。故岡部健医師の言葉にあるように、「人が死に向かい合う現場で、医療者とチームを組んで入れる日本人の宗教性にふさわしい日本型チャプレンのような宗教者が必要」だと私も実感しています。

ラウンジに掲示するそらカフェの案内は、漫画家でもある天野和公さんがブラックボードにカラフルなパフテルカラーで描いて下さいます。とてもお洒落で好評です。楽しさと遊びこころを取り入れながら、くつろげる場を提供することもそらカフェが大切にしたいコンセプトです。

「そらカフェ」が、臨床宗教師、医療チーム、ボランティアが協働して医療機関、地域でこころのケアを提供する実践モデルとして、今後更に経験を重ね洗練していきたいと思います。　（おおしま　ひでこ）

◇

臨床宗教師としてカフェに加わった臨床宗教師のお二人から感想をいただきました。

「静かにそっと、たたずんでいてほしい」。最初に大島さんからカフェのお話を頂いたとき、印象的だった一言でした。

上尾中央総合病院緩和ケア病棟は、病室、浴室、家族室、絵画の一枚に至るまで、患者さまがいつも安心して過ごせるようにとのスタッフの願いが細やかに体現された素晴らしい空間です。市内一円を見渡せるラウンジにはひときわ穏やかな時間が流れ、優しい空気が醸し出されています。

コーヒーはちょっとこだわって、高円寺のカフェ「ぽれやぁれ」から取り寄せたミャンマー産をご用意しています。窓際でほっと一息くつろぐお医者さま。ベッドのままお越しになった患者さま。看病の合間に立ち寄ったご家族さま。

そこに一緒に居させていただく。命の音、呼吸、思いを共有させていただく。そこには「臨床宗教師によるケア」という言葉すら不釣り合いで、ただ存在と見守りがもつシンプルで大きな力を感じながら過ごす、私にとってはそんな時間です。　（天野和公）

◇

そらカフェに参加させて頂き、緩和ケア病棟で臨床宗教師が関わることの意義を感じています。私が普段いる在宅緩和ケアの現場とは、患者さんの環境が大きく異なりますが、患者さんやご家族が抱える苦悩と希望の姿は何も変わらない。そして、それを見つめるスタッフさんの優しさとそれゆえの苦しみも。

私自身も患者さんの死と向き合うなかで、生前の在り様を思い出し、不思議な感覚になることがあります。これを宗教的体験というわけではありませんが、死を知り、今を生きる姿のなかに教理を観る力を、我々宗教者は養わねばならないと思います。

医療者とは違う視点だからこそ、最先端の医療現場にあって倫理観や人間観などを互いに考えて育んでいくことが出来るのではないかと思います。

最後に、そらカフェという大切な場を宗教者に開いて下さった上尾中央総合病院様と臨床宗教師の良き仲間である大島英子さんに心より感謝申し上げます。

（高橋悦堂）

第７回臨床宗教師研修報告

研修データ
期間：2015/5/19-17, 6/22-23, 7/22-23
場所：石巻市曹洞宗法山寺、石巻市曹洞宗統禅寺、仙台市浄土宗蓮光寺、東北大学、他
修了者：19名(うち女性5名)
宗派内訳：　曹洞宗(2)、真宗大谷派、浄土真宗本願寺派(2)、浄土宗、天台宗、高野山真言宗、真言宗御室派、真言宗大覚寺派、東寺真言宗、日蓮宗、法華宗陣門流、立正佼成会、日本基督教団、保守バプテスト同盟、天理教、金光教、神社本庁
地域：北海道、岩手、秋田、福島、栃木、埼玉、東京、神奈川、静岡、岐阜、愛知、滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫、徳島、熊本

第7回臨床宗教師研修の形式は、従来通りに二泊三日1回、一泊二日2回の合宿（全体会）とその合間の各地での分散実習のかたちで行なわれた（スケジュールは別表の通り）。修了者は19名で、これによって2012年から現在までの修了者数は累計114名となった。

今回の研修には、かつてなく応募者が多く、少なからぬ方々をお断りせざるを得なかったが、すでに何らかの社会活動等を実践されてきており、研修の成果をどのように活かしていくのか、具体的な活動計画をお持ちの方々を研修に受け入れることができた。

2012年の第１回研修には、とにかく被災地の役に立ちたいという想いに突き動かされて来られた宗教者の方々が少なくなかったが、３年を経て、さまざまな現場における臨床宗教師の活動が報道等を通じて周知されてきたことによって、明確なヴィジョンを抱いて研修に集まる宗教者が増加したという印象である。

今回の受講者の平均年齢が約45歳というのはこれまで同様だが、応募時点で20代の受講者が３人というのは今回が初めてであった。受講者の居住地域は18都道府県にわたり、また、宗教・宗派も多様であり、神仏基のバランスがとれた構成であった。

新たな実習先として、上尾中央総合病院緩和ケア病棟（埼玉県）、小笠原内科（在宅緩和ケア、岐阜県）、にじいろのいえ（ホームホスピス、宮城県）が加わり、全国11ヶ所の医療・福祉施設を実習先として選択できる体制で行われた。

今回もまた、曹洞宗法山寺様、曹洞宗統禅寺様、浄土宗蓮光寺様に会場をお借りした。また北海道東北臨床宗教師会の皆様にご協力いただいた。記して感謝申し上げる。

５月の全体会１では、法山寺の北村暁秀副住職の先導で石巻湊地区において追悼巡礼を行なった。

旧北上川河岸での追悼儀礼は、宗教宗派ごとにまとまって交替で行われた。（下の写真は、金光教、天理教、神社神道の３人による儀礼）。

六月の全体会２では、名取市閖上地区を訪れた。かさ上げ工事が進む中、従来とはコースを変更し、津波で生徒14人が亡くなった閖上中学校前、「種の慰霊碑」と「芽生えの塔」からなる東日本大震災慰霊碑前、日和山山頂の閖上湊神社において追悼の祈りを捧げた。（下の写真は浄土系仏教の受講者による閖上の慰霊碑前における追悼儀礼）

ロールプレイ

グループワーク（会話記録）

傾聴実習（カフェ・デ・モンク）

日常儀礼（天理教）
多賀城教会の方々にご協力いただいた

日常儀礼（真言系合同）

カフェでは住民さんに温かく迎えていただき石巻復興節で締め括られた。

グループワーク（会話記録）
各地の医療・福祉施設等での傾聴実習の記録をもとに読み合わせを行ない、感情の動きを見つめる。

修了式(2015年7月23日、東北大学川内キャンパス

第7回臨床宗教師研修（長期型、被災地＋看取り）予定表　150617

	5月全体会			実習期間1	6月全体会		実習期間2	7月全体会	
	5/19火	5/20水	5/21木		6/22月	6/23火		7/22水	7/23木
7:00									
8:00		朝食 日常儀礼 G	日常儀礼 G 朝食			朝食 日常儀礼 G			朝食 日常儀礼 G
9:00	集合930石巻駅前	傾聴 G	社会実装 L 実習先説明 ※2	実習 F 次の全体会までの間に各自、12時間以上の実習、実習記録／会話記録作成	集合930南仙台駅前	追悼巡礼 F ※1 開上	実習 F 次の全体会までの間に各自、12時間以上の実習、実習記録／会話記録作成	集合930南仙台駅前	会話記録 G
10:00	オリエンテーション	地域と文化 L ※2			日常儀礼 G	会話記録 G		日常儀礼 G	
11:00	自己紹介・参加動機	昼食 移動	ロールプレイ G		公共性 L			宗教間対話 L	
12:00	理念 L ※2 昼食 休憩	実習 F カフェデモンク 大橋仮設 南境第7仮設	昼食・清掃 休憩		実習振り返り G 昼食 休憩	昼食・清掃 休憩		実習振り返り G 昼食 休憩	清掃 東北大へ（川内南総合棟小講義室） 昼食
13:00	追悼巡礼 F ※1 石巻湊地区		ロールプレイ G		実習振り返り G	会話記録 G		実習振り返り G	実践宗教学
14:00					精神保健 L			グリーフケア L ※2	研修振り返り G
15:00			スピリチュアルケア L ※2			宗教的ケア L ※2		実習振り返り G	
16:00	入浴 夕食	入浴 夕食	研修振り返り G 日常儀礼 G		放射能 L	研修振り返り G 日常儀礼 G		入浴	
17:00	休憩	休憩	解散		入浴 夕食 休憩	解散		休憩	修了式 解散
18:00	倫理 L ※2	実習振り返り G						人権擁護 L ※2	
19:00	カフェデモンク L ※2	会話記録の作成法 在宅緩和ケア L ※2			民間信仰論 L ※2			日常儀礼 G 夕食・懇親会	
20:00	死の経験 G								
21:00	日常儀礼 G	日常儀礼 G			日常儀礼 G				

研修受講者の声
（第7回臨床宗教師研修）

第７回臨床宗教師研修の最終日「研修振り返り」においてお話しいただいた内容をもとにまとめました。

櫻林佑樹（立正佼成会）

現在、私は宗教立の病院の緩和ケア病棟で看護師として勤務しています。緩和ケア病棟の特性として、予てから、病勢だけでは推し量ることの出来ない、患者さんばかりか周囲まで一体となった時にかもし出される、QOLの在り方に関心を抱いていました。また、その病院には、臨床宗教師が実習に来院していることもあり、こうした事柄も、私を今回の研修に駆り立てました。

看護師の立場は、医師と患者さん、あるいは医療行為と患者さんの中間に立ち会うものです。時に、それは単なる肉体的な苦痛とは別次元の、一人一人の患者さんの心に痛みに立ち会い続けることを意味します。初めて生まれ、初めて大病を患い、突如として愛する人や社会との関係の清算に迫られ、誰しもが掛け替えのない人生に底無しの不安を抱えるのです。その際に、いわゆる医療目線のコミュニケーションだけでは限界があり、先の見えない不安に対して、長い歴史の中で、日本人がどの様にそれを受け止めてきたか、つまり、宗教的な立場から為される傾聴の重要性を感じないではいられないのです。少子高齢の日本社会では、待ったなしにこうしたケアの必要性と分野の確立が求められていると感じます。こうした問題意識の中で、宗教と医療の両方の立ち位置にある私は、これからの社会に求められる医療にとって、臨床宗教師が必要不可欠な存在であることを、きちんと伝えていきたいと願います。最後に、第7期の研修でお世話になった素晴らしい先生方と、掛け替えのない仲間に感謝いたします。

坂野大徹（浄土宗）

緩和ケア病棟に行く前にどういうふうに患者さんに接するかわからなかったんですが、接するうちにわかってきたのは、患者さんに合わせて接すればいいんだということで、患者さんが求めるもの、仏教なら仏教、宗教なら宗教を求められる中で、スピリチュアルケア的な接し方をすればいいのかなとわかってきました。

たまに三重県の家に帰るのですが、先日、帰ったら机の上に置いてあった妻のメモに、「人のために何かをしようとする人は、家族を顧みない」と書かれていました（笑）。家内には家を守ってもらえるもんだと思っていたんですが、だけど、家内の心の中にはもっといろいろあるんだなと思いました。ですから、これから、人のためも大事ですけど、家内のことをよく理解し、家庭の安定を得た上で、実習で感じたことを活かして臨床宗教師としての活動を探していきたいと思います。

鷲尾千賀子（東寺真言宗）

今回この研修に参加して、まず自分がやってみる第一歩が踏み出せてよかったなと思います。実習に行かせていただいて、実際に大変な思いをされている方がいるというのは自分にとってショックなことで、会話もうまくできなくて失敗だったと思うことばかりでした。普段はそういうことにふたをしてしまうんですけど、それをグループワークで分かち合うことがすごくよいこと、自分にとってよくないことでも、分かち合うことで温かいものが生まれるなと私は感じたんで、これからもこのつながりを続けていけたらな、とすごく思っています。私も傾聴の活動を続けていきたいと思っています。その時、人の反応に一喜一憂するのではなく、自然にありのままを受け止めていきたいという目標を立てて、頑張っていきたいです。

眞如晃人（曹洞宗）

私は、母方も秋田ですし、東北に友人も多いのですが、震災の時に何もできなかったなあと思っていたので、東北でこうした研修を受ける機会に恵まれ、まず、嬉しいという気持ちがありました。実際に参加して現実が変わっていないのを見て、自分にできることはないと思っていた部分もあった中で、できることを探して、害にならない程度のことであったとしても、ほんの少しでも何かを積み上げていければと、改めて自分自身に何ができるのかを考える機会になりました。課題は、正直言うと私は大変人見知りでして、地元に帰って自分の寺を出て何ができるのかを探していかなければならないと思うんですけれども、その中で、少しでも誰かとつながったりということをしながら、今度は自分の地元で困っている人を少しでもサポートできるような自分でいられるようにしたいと思っています。

田中嘉章（保守バプティスト同盟）

最初は臨床宗教師は仏教者が多いと思っていたので、馴染めるかという不安があったんですけれども、みんな気さくでいい人で、魅力的だなと思いました。これからも仲良くしていただければと思います（笑）。私の仕事は在宅緩和ケアのソーシャルワーカーで、困っている人のことを聞いて、何かをするということばかり身に付けてきましたが、臨床宗教師としての会話の中で、自分の気持ちっていうものがよくわからない、ということがよくわかりました。

岡部先生は「ソーシャルワーカーは攻めろ」とおっしゃっていましたが、臨床宗教師はどうかな、という時に、自分は、ありのままの裸の自分をさらけ出して、相手のありのままの姿を受け止めて、自分が持っている信仰や信念や、学んだことを相手のために役立てるようにしていくことが必要なんだなと思いました。そして、相手が仏教のことが必要だという時にはきちんとつなぐというようなことを含めて、魂を助ける役割というのが必要で、自分をガードして、傷つかないようにするのではなく、勇気を出して相手に向き合っていこうとしなければと感じました。

川端　勝（浄土真宗本願寺派）

課題は、感情の壁を超えるということですね。感じたことは、実習に行かしてもらって、在宅緩和ケアの訪問看護に看護師さんと一緒に行ってやっぱり、在宅ケアというのはチームでやった方がいいということですね。介護をされている方の大変さというのを現実に学んで、その人たちのことを何も知らないで現地に行くのではなく、普段からチームワークの中で情報交換を行ない、その中で臨床宗教師として入ることが必要だと一番感じました。もう一つは、宗教間対話ということで、他宗教の人にもわかっていただけるような、定められた儀礼の進め方を、どのようにして伝えていけるか、たとえば経本を床の上においてはいけませんよといったことも伝えたいと思いました。同時に一般の、未信の人に対しても、どのようにして触れやすい、馴染みやすい儀礼のあり方を伝えていけばいいか考えるきっかけになりました。

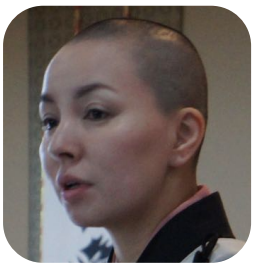
玉春なおみ（浄土真宗本願寺派）

九州から来ておりますけれども、東北の地で津波の被害に遭われた方々の声を直接聴けたこと、それを支えてこられた宗教者の方々の実践を体験させていただいたことは、自分の中で、時間の大切さとか生命の大切さとか、さまざまなことを考え直すいい機会となりました。

いろいろなところで宗教的な儀礼と資源というのは力があるな、というのをあらためて教えていただきました。そして、感情を言葉にすることの大事さ、言葉の力の大きさというのも新しい気づきでした。グループワークとかで、言葉ひとつひとつの表わし方次第でみんながほっとするとか、すっきりするとかいうのを何回も体験させていただいたことが宗教者としての財産になりました。

自分が宗教者としてどうなんだろうという迷いがあったんですけど、宗教者としてやっていきたいという気持ちになりました。そのために宗教に関してもいろいろなことを学びたいし、言葉の表わし方というものを深めていき、いろんな方と接していけたらな、と思っております。九州臨床宗教師会のカフェ・デ・モンクに参加させていただき、自分のお寺でも地域の方と接しながら、信仰を大事にして、研修で学んだものを出していきたいと思います。

酒井菜法（日蓮宗）



私は布教や営利ではない活動をお寺で様々に時間をかけて行ってきているので、臨床宗教師の活動の理念に自信がありました。しかし研修で上尾中央病院に入った初日はとても矛盾している自分に気づきました。私の行っている布教や営利ではない活動というのは、父の跡を継いでお寺を発展させていくための方便で、本当はお寺を地域に根付かせる為の活動であり、お寺から離れた場所で行う事に抵抗がある事に気づかされました。

上尾ではウィッグを着けてナースの格好をし、聴く専門の方として紹介され、宗教色を出さないようにして傾聴することへの疑問もあり、自分の気持ちのコントロールがうまく出来ませんでした。また、一方では私よりもずっと遠い所から、お金をかけて来られている臨床宗教師の方もいて、何故大変な中来るのか、偽善ではないだろうかと思う自分も生まれ、次々に湧き出る醜い自分の気持ちが複雑でした。結果、すべて終わった時には、布教や営利ではないところで関わるからこそ、大きな仏縁という自分の信仰の中での関わりがあり、その中で出会った人というのは、私が僧侶として生きる上でとても重要な存在として彼らが心に残るという気づきに至りました。今後は自己満足ではなく無理がない程度に、お寺以外での傾聴活動を継続していきたいです。23年前に「チャプレンになりたい」と思った気持ちを今、多くの方にご指導頂いたおかげで実現し、新しいスタートを切れた喜びでいっぱいです。これからもお寺の外に出てアウェーでの体験の中で自問自答し研鑽を重ねていけたらと思っています。どうぞ今後とも皆様のお力をお借りし、ご指導ご鞭撻頂けますようお願い申し上げます。様々な経験をさせて頂いたスタッフの皆様、上尾中央病院の皆様に深く感謝申し上げます。　合掌

井川裕覚（高野山真言宗）

無事に研修を終えてほっとしています。研修の感想としては、最初に生育歴を書いたのが面白く、興味深かったですね。それから会話記録も、どう対応すべきかという振り返りではなく、自分の感情を見つめるのが目的だったので、今までいかに自分の感情を軽視していたんだろうかと感じました。

私は修行時代、高野山で60人の仲間と僧堂生活をし、一生の仲間ができました。今でもその繋がりが、すごく心の支えになっています。

それと同じように、ここで同じ釜の飯を食べて一緒に泣いて、笑って、喧嘩して、同じ志を持つという経験をできたことが1番嬉しかった。この僧堂生活がまさにスピリチュアルケアであり、裸の付き合いこそ臨床宗教師として必要なことではないかと思いました。

研修を終えて、これまで宗教者として檀信徒と関わる時、いつも結論ありきで、その人の内に湧き上がる宗教性をいかに無視してきたのかと痛感しました。もっと対等な目線で、膝を突き合わせて相手の声に耳を傾けることの大切さを実感しました。

今後は臨床宗教師としての実践の場を探すとともに、ここで学んだ臨床宗教師的な目線で、社会と繋がっていきたいと思います。

中村博武（日本基督教団）

はっきりいって、臨床宗教師というポジションは本当に役に立つのかな、と思っていましたが、五日間実習に行ってみて、確かに、役に立つ場面もあるというのがわかりました。それが自分の一番の手応えです。ただ、自分の力量でできるのかどうかはまだかなり疑問で、私には人の話を聞きながら自己主張する非常に悪い癖があって、それをなんとか直したいです。感情のことを言われましたけど、私の中にある感情って99％怒りなんですよ（笑）。怒りは絶えず感じていて、独り暮らししていると寂しさも感じますが、それ以外はないんですね。母親が亡くなったりしたら悲しみはどっと出てきますが・・・。だから南さんみたいな人がうらやましいんですよ。私は感情をかなり否定していると思います。だから課題としては、自分の存在を消して、気にならない人として死にゆく人のそばにいることを目指したいと思っています。

南　千代（真言宗大覚寺派）

中村さんに、「私みたいな人が羨ましい」とのお言葉をいただき、私は、聡明な中村さんがすごく羨ましく尊敬しています。同期の皆様のスマートさ、私は持ち合わせていない素晴らしさを体と魂で感じ、自分に自信がなく傷心の私には、中村さんのお言葉は意外で衝撃であり、何よりも非常に大きな勇気をいただきました。感謝しています。20年前から両親と子供２人で、17年前に母を亡くし、いわゆる大黒柱として生きてきた私は、様々な感情を抑え、苦しみも、幸せもプラス思考に捉え、明るく振舞うことが常でしたから、寝る前の一人の時には、心の引き出しにしまっていた様々な感情を出していましたが、いつのころからか「明るい悩みのない幸せな南」になっていました。

今回の研修では、自分を見つめる機会を得て、人生を乗り越えてきた自分に「お疲れさま」と伝え、さらに自分に向きあえました。私は、感情を雰囲気で伝えることができる体現力はあるが、言葉を用いた表現力は不足していると学びました。自分は感情豊かであることを知り、素直に見つめ続けていこうと思います。ですから、私は、中村さんのような方がとても羨ましいのです。今、目頭が熱くなり、ほほを伝っています。かつての自分、内面に気付けずにいた自分を恥じています。導いてくださった谷山先生、諸先生方にただただ感謝しています。胸と喉があつく苦しいですが、心はとても安らかです。ありがとうございました。

中学３年の時に祖母を看取り、遺言により看護師の道に入り、現在35年目を迎えました。がん患者さんの疼痛緩和ケア、家族の方々の心のケアなど、様々な方々の看護をさせていただくことができましたこと、また私生活では、両親のがん闘病生活、母の看取り、父の右肩腕切断により、苦しみを体に心に抱えた方、終末期の方々の心と魂に対するスピリチュアルケアの重要さを認識し、出家して僧侶と看護師の両立をしていますが、今後も続けていきたいと考えています。そして、住職を勤める寺を護り、超宗教の臨床宗教師に属する宗教家として、民間信仰も含めた様々な信仰心を大切にし、東北大学の講座に学ぶ貴重な機会をいただいたことに感謝し、学ばさせていただいた臨床宗教師の大義に殉じ、さらに自己研鑽を重ね努力していきたいと思います。実習でお世話になりました、ビハーラ21のケアホーム「あかんのん」に、ボランティアとして定期的に伺いたいと思います。谷山先生には感謝いたしております。ありがとうございました。

三品亮徹（法華宗陣門流）

私は、ボランティアなどあまり参加したことがなかったので、やっていけるんだろうかと思っておりました。今回参加の皆さんは魅力的な方ばかりで、仲間に入れないのではないかと心配しましたが、すぐ打ち解けることができて良かったです。私はもともとお寺の生まれではなく、「おまえ信仰心があんのかよ？」と言われることもあるのですが、自分の中では確固たる信仰心があると思っていました。でもそれだけじゃ足りない、というのは今回の研修でよくわかりました。また、言葉だけじゃないコミュニケーションもあれば、言葉や距離感で相手を傷つけることもあるということも実感しました。この研修で、宗教に自信がない、自分に自信がないということに気づきました。なので、これからいかに踏ん張れるか、土台を作れるかということが課題だと思いました。

倉田恒雄（金光教）

傾聴、スピリチュアルケア、宗教的ケアなどを、大学での講義のように学ぶことが中心になるのかと思っていました。それぞれの研修内容は自分を見つめ直すという作業に向けてのことで、自身を隅から隅までを見る良い機会になりあらためて多くのことに気づくことができました。

また、追悼巡礼や人々と接するなかで、宗教者として祈ることの大切さを再確認したところです。宗教者として大切にすることプラス何かやれることはないかと模索している中での参加でしたが、進むべき方向が見えてきたようです。これまでも地域社会との関わりある活動をしてきましたが、さらに一歩踏み出していきたいと思っています。支援をする一人として、出過ぎずに、また出なさ過ぎない、ちょうどいい立ち位置や役割を自覚していきたいと思っています。

西郊良俊（天台宗）

私も、まさか自分自身を見つめるとは思っていなくて、結果的に自分自身を見つめるチャンスをいただいたことはよかったと思います。傾聴というと、他者のために、と頭では考えていたんですけれども、それをするためにはまず自分自身を見つめる。言われてみればそうだな、と。今まで38年間生きてきてそんな作業なんかしたことがなかったので不安もあったんですけれども、そこを皆さんや先生方にサポートしていただいてなんとかできたのではないかと思います。課題ですが、宗教的ケアを強く出せない自分がいるということがわかりましたので、実習をさせていただいた長岡でボランティアを続けながら、それをどのように出していけるのかを考えていきたいと思っています。

福田常男（天理教）

私の生活の中では、仏教と出会うのはほとんどお葬式の場面でしたから、こんなに仏教の関係者がいるとは、正直、思いませんでした。このたび日常儀礼を間近に見て、音声もすごいなーと思いました。それで仏教の死生観とか表現されているのでしょうが、意味の不明というか…（笑）。分かりにくいです。でも、一人ひとりお会いすると明るくのんきで、素晴らしいなと感じました。そういう宗教心なら、おおいに共通点があるのです。臨床宗教師として、仲間としてやっていくには、仏教の関係者からもう少しわかりやすいものをいただけたらなと感じました。

スピリチュアルケアに関しては非常に関心がありました。突き詰めてみると、私の宗教的ケアと心情的にほとんど重なるので、これはひとつの発見でもあり、愉快だったし、嬉しかったですね。

佼成病院での実習はアウェーに従いなさいということで、「アウェーッ」としてやっていたのですが（笑）、天理教のよろづ相談所病院が、秋に(その後、来春に延期となった)、緩和ケア病棟を立ち上げますので、患者さんとの出会いも含めてたいへん参考になり、ありがたいことでした。

また、東日本大震災後の現状を改めて見聞きしました。ことに、福島の憂える状況は、日本人の心の復興という大きな課題と直面していると感じます。これについては、色んな場面で発信していきたいと思います。

昔は「天理教です」と病院布教に行った時に、おまえなんかが来るところじゃないと水をまかれたり塩をまかれたりしたこともありましたが、臨床宗教師研修によって、立場を説明して入っていくことができて、窓口が開けられるかなと考えております。60歳過ぎてしんどい面もあるんですが、まだまだやるぞーっという気持ちになってきました。

松本宜隆（真言宗御室派）

いろんな宗教の方とお知り合いになれて、ありがとうございました。日常儀礼とかも初めて見るのばっかりで、すごく楽しくて有意義でした。自分はやっぱり宗教家よりも、仕事がデイトレーダーなので（笑）、あまり宗教に力を入れてなかったなと改めて思いましたね。課題としては、まず、修行し直してきます。今回の研修でいろんなことを学んだんで、それを継続するためにも、実習地を探して継続的にやっていきたいと思います。

池内龍太郎（神社神道）

私はこの研修中、非常に楽しく過ごさせていただきました。他の宗教の方々とお話しするということがまるで初めての経験だったので、壁を感じるかと思いきや、最初からフランクにお話をしていただける方が多かったのでありがたかったです。

私は医者になって十年目なんですけれども、十年目というと、もう下を教えていかなければならない時期になっていまして、たとえば大学生の方に授業をしたり、地域の医師会の先生方に講義をするとか、新しくお医者さんになった方達を指導したり怒ったりしなければならない。患者さんに対しても怒ったりしていますけれども、実に偉そうなことを言ってるんです。私は常々、偉そうなことを言っているかわりに、自分は何を差し出しているんだろうと悩んできました。高潔な精神性とかもないし、自分にできることって言ったら、勉強することかな、と思うんです。医学の勉強することは得意なんですけど、それだけでは到底うまくいかないんです。

たとえば外来で、神職だったら言わないだろうということを言ってたりしますね。病棟のおばあちゃんがもう帰りたいと泣いている時に、家族からはできるだけ長く生かして欲しいと言われ、医者の立場上、まうそう言わずに頑張ろうという話もしなくちゃいけない。でも、神社の窓口で同じ悩みを聞いたら、それは頼んで退院させてもらいなさいと言うと思うんですね。そういうことの繰り返しで、二つの立ち位置、二つの価値観、どっちにも合致することを言わなければならないけど、うまくいかない。医者と神職という二つの立場の整合性がとれない。それをなんとかしようと勉強させてもらいに来ました。

グループワークの中で、友達感覚で話を始めてしまうとどうしても宗教の話ができないという悩みを相談した時に、悦堂さんに、それでいい、その場にいるだけで雰囲気が和むような空気清浄機になれ、ということを言われました。それを聞いて、私はガーンと来まして、さすがテレビに出る臨床宗教師だなと（笑）。その話を聞いてから、矛盾せずに統合しなけりゃいけないんじゃなくて、医者だから言えることも言えばいいし、神職として言えることも言えばいい、両方の選択肢があってお得なんだと考えられるようになりました。これからは医者と神職の二つの色を淡いグラデーションでつないでいければと思いました。今後の目標としては、続けていきたいということです。学んだことを忘れないようにするためには、フォローアップ研修などに参加しながら、少しずつ、息の長い活動をしていければと思っています。

三浦賢翁（曹洞宗）

私は四人の子供の出産に立ち会ってきましたが、看取るということは出産に立ち会うことと似ていると感じました。私達は葬儀を仏様の世界への旅立ちの儀式としてお勤めさせて頂いています。

出産の立ち合いは、精神的肉体的苦痛を抱えている母親の声を聞き、手を握り、マッサージをし、一緒に呼吸して「赤ちゃんをこの世に受け止める」ということ。看取りは死を前に精神的肉体的苦痛を抱えている人の傍に立ち「この世から新たな世界へ送り出すこと」だと思います。

立ち会い出産研修の最後に、「すべては妊婦さんが正しい」と教えられました。「ここで教えられた通りのマッサージをしても、もし妊婦さんが別な所を違う方法でして欲しいと望まれたらその通りにしてあげて下さい。　触られるのが嫌なら触らないで下さい。妊婦さんは一人一人違います。その時その時で違います」と。

看取りも、その方の心に寄り沿って相手の求めに応じて、自分が出たり引いたりすることで信頼も得られ、私達の出番も増えて来るのではないかと思います。

臨床宗教師講座に参加させて頂き一番嬉しかったことは、各分野で活躍されている先生方、スタッフの皆さん、そして同期生の仲間に出会えたことです。人生のクライマックス、フィナーレに立ち合えることは人間として光栄なことですし、皆さんと共に、この道を精進して行けることを光栄に思います。

里雄淳意（真宗大谷派）

最初私は、超宗派での研修ということで、大丈夫かなと思っておったんですが、それが大事なこと、肝なんだと感じました。それを思ったのはお仲間と出会わせていただいたからだなと思います。みんな宗教者として、危機感というか、なんかせんならんという気持ちを持っておられて、それに触発されました。ありがたかったなと思いました。最近、寺で泊まってやる研修は避けてきたんですけど（笑）、一緒に飲んで楽しい仲間と出会えたのがよかったと思いました。

課題ですけれども、私は身近な人の傾聴を大切にしていきたいなと思いました。嫁さん、子供、自分とこのご門徒さんに、きちんと向かい合って傾聴できるようにしたいと思います。この研修に来て、沼口さんのところにも行って、少し変わったなと自分でもわかります。こないだもお参りに行って、おばあちゃんが「頭痛い」と言うのを、「冷たいもん気ぃつけやー」と帰ろうとして、いやこれはあかんなと立ち止まって、座って、少しお話を聴いてきました。これはこの研修に出た成果だと思います。いかにできてなかったかということだと思います。これからは、沼口先生のところにできる新しい病棟、地元のビハーラの会でも頑張っていきたいと思っています。

仏教看護･ビハーラ学会

入棺体験レポート

～谷山准教授の科研プロジェクトを兼ねて～

森田敬史

北陸新幹線開通を皮切りにして街全体が活気を帯びている金沢の地で、仏教看護・ビハーラ学会第11回年次大会が開催されました。厚生労働省が主導する地域包括ケアシステムの実現に向けて学会としてどのように貢献できるかということを議論する目的で、「医療看護福祉の地域連携と仏教者」という大会テーマが掲げられました。そのテーマの下、暑さが残る8月28日（金）から三日間、金沢真宗会館（石川県金沢市）にて熱い議論が交わされました。

学会初日の28日に、今大会の目玉の一つである、学会参加者による入棺体験がありました。近年、終活セミナーなどが行なっているような、葬儀社が準備した本物の棺に入り、亡くなると、こういう空間に身を置くのかということを実体験できる機会であります。当然でありますが、実際に入る時には何も感じられる状況ではないか、逆にそれを見ている側でしかないため、貴重な体験として、多くの学会参加者の関心を誘いました。特に今回は、地元の僧侶（真宗大谷派・浄土真宗本願寺派・日蓮宗）がそれぞれの宗派のスタイルで読経を行なう中で、その体験ができる珍しい機会でありました。

谷山洋三准教授が代表を務める研究プロジェクト「喪失と悲嘆に対する宗教的ケアの有用性とその専門職育成についての研究」の実験を兼ねて行なわれたため、少々窮屈なタイムスケジュールでありましたが、それぞれの思いを胸に参加者たちは入棺という体験をしました。研究の一環であるため、参加者たちにはアンケートとともに合間で三度も唾液採取のお願いをしました。読経によりストレスがどう変化するかを生理学的に明らかにしようとする試みのためですが、今まで客観的に明らかにされることがなかったため、結果が待ち遠しいところです。

入棺に先立ち、「死の体験シミュレーション」というワークを行ない、より一層自分が亡くなること、様々な大切にしているものが自分から離されることを実感しました。そのムードが盛り上がったところで、棺に入るため、“自分の死”を素直に感じることができたようでした。「死の体験シミュレーション」を進めた主催者の一人として、もう少し時間的なゆとりをもつことができれば、それぞれの参加者に染み渡る感覚をより強くもってもらえたのではないかと振り返っていました。けれども、参加者たちの声をお聴きする限りでは、それでも一定の喪失感を生み出すことができたようでありました。一連の流れを経験した参加者たちの声には、「最初は喪失を体験する事が辛かったが、徐々にその気持ちが多くの大切なものを誰かに託すことができる安心感に変化していった」という思いがけない反応や、普段はお経を唱える側の僧侶が「棺の中で耳に届くお経を新鮮な感覚で体験して有り難かったです」等がありました。

学会事務局長である原武嗣師は、「真宗大谷派の僧侶が唱える正信偈が音として感じられ、棺の中の空間に満たされるような感じを受けました。さらにそれが私を含めて全て、これを壮大なスケールで言えば宇宙全体に伝わっていくような感覚を抱き、その一体感が心地よかったです。」と入棺体験を振り返っていました。棺に入るという体験であるにもかかわらず、心地がよい感覚というのは少々意外な気もします。しかし、真宗大谷派の僧籍をもつ原事務局長だからという訳ではなく、棺という特殊な空間の中で感じられる読経に対して、お経の内容や意味合いはともかく自分に向けられ響いてくる“気持ちのよい音”として感じられたことは間違いないようでありました。研究結果を待つまでもなく、唱えられるお経には一定の救いの効果があったのではないかと、入棺体験をした一人として報告者も強く感じました。

（もりた・たかふみ）

各地の動き

臨床宗教師会の活動報告

北海道東北臨床宗教師会

昨年12月に発足式を行い、スタートを切った北海道東北臨床宗教師会は、今回第七期修了生３人を新たに加え27名となった。会として発足１年目であり、まずは組織としての形を整えることを第一としながら、会員の資質向上のため、会話記録や活動報告の勉強会にも力を入れてきた。Facebookページの開設、対外連絡用事務局アドレスの公開なども行った。

その間、東北大学臨床宗教師研修の手伝い、龍谷大学の臨床宗教師研修へのオブザーバー参加など宮城・仙台で行われる臨床宗教師研修にも協力参加をした。11月には総会、12月には初の市民公開シンポジウム、宮城でのフォローアップ研修を予定している。また、地方新聞などをはじめ様々な場面で会員のメディア露出も増え、会員が医療や福祉関係の勉強会などで講演をするケースも出てきた。

来年度は、組織運営の堅実化、勉強会の充実による会員資質向上、定期行事などによる社会への啓発、苦悩を抱える方への支援などを行っていきたい。また、活動が仙台市内に偏らないようにする方向も模索したい。

（高橋悦堂）

■運営会議
・5月15日　会場：洞林寺
・6月23日　会場：洞林寺
・7月23日　会場：洞林寺
・9月8日　　会場：東北大学文学部棟内
・10月2日　会場：東北大学文学部棟内

■勉強会 SV（スーパーヴァイザー）、C（臨床宗教師）、G（ゲスト）
・5月7日　SV２ C６ G１　計９名　東北大学文学部棟内
・6月4日　SV２ C６ G１　計９名　東北大学文学部棟内
・7月9日　SV１ C７ G１　計９名　東北大学文学部棟内
・9月16日　SV１ C４ G３　計８名　オタワ愛徳修道女会管区本部
・11月5日（予定）
・1月7日（予定）
■総会　11月11日　仙台富沢教会（予定）
■東北大学臨床宗教師研修スタッフ協力
・第七期 5月19-21日、6月22、23日、7月22、23日
・第八期10月5-7日、11月10、11日、12月15、16日（予定）
■龍谷大学臨床宗教師研修東北実習オブザーバー参加　6月1、2日
■共催
市民公開シンポジウム 12月6日（予定）
「いま知りたい、臨床宗教師」東北大学文学部棟内
■共催
フォローアップ研修＠東北 12月7日 蓮光寺（予定）

関東臨床宗教師会

二か月に１回のミーティングは、会員の親睦を深めながら各々の活動を振り返る場になっております。臨床宗教師と一口に申してもその活動内容は多岐にわたります。各々の活動を聞くことを通じて、自分を振り返りさらに活動のきっかけになればと思っております。そして、今後は各々が活動していくのとともに関東臨床宗教師会としての活動も模索していきます。　（遠山玄秀）

●6月25日（木）関東臨床宗教師会発足式
参加者：臨床宗教師 9名、オブザーバー 3名、スカイプ参加１名

●8月27日（木）　第２回関東臨床宗教師会ミーティング
参加者：　臨床宗教師 13名　オブザーバー ３名
●次回予定 10月23日（金）　19時より

中部臨床宗教師会

●6月18日（木）「今後の具体的取り組みについて」
会　場：沼口医院
参加者：五辻文昭、野々目月泉、武藤隆広、田中至道
●6月30日（火）「カフェ・デ・モンクについて」
会　場：沼口医院
参加者：沼口院長、五辻文昭、野々目月泉、武藤隆広、田中至道

「カフェ・デ・モンク始動します」

中部臨床宗教師会でお世話になっている大垣・沼口医院理事長沼口諭先生がメディカルシェアハウスアミターバ〔臨床宗教師の在駐する在宅型ホスピス〕を開業されるのにあたり、常設のカフェ・デ・モンクコーナーを設けて頂けることになりました。厨房設備や接客スペースのある本格的なカフェのコーナーで、合わせて臨床宗教師の活動拠点となる一部屋もご提供下さいました。

臨床宗教師は随時傾聴活動が可能になり、また普段平日には来ていただけない地域の方々にも足を運んで頂けるよう、土日祝祭日の月例会なども軌道に乗り次第実施に移される計画です。公的医療機関を含む多方面からの、出前カフェの要請が早くも入っており、地元での期待の高まりを感じさせる嬉しい知らせです。

５月以降カフェ・デ・モンク準備打ち合わせ会を持ち、７月に同ボランティア募集要項の確定、印刷、配布、募集を開始し８月末締め切りで10名の応募を受けつけました。

９月６日の説明会・面接では　、施設主の沼口先生の挨拶の後、６期松本師が運営協力団体としてカフェ・デ・モンク設立の経緯など挨拶し、その後事務局５期田中師がカフェ・デ・モンクについての説明、５期野々目がボランティア活動についてと実際の活動要領などを説明し、面接に入りました。どの応募者も熱意と思いが溢れ、予定面接時間をオーバーし、全員採用となりました。

これから臨床宗教師のティーサービスや案内を含む実施研修、ボランティアの実施研修を経て10月18日の内覧会当日にはボランティアも参加したデモンストレーションを行います。その後施設の本格開業に伴って、週3日～4日の常設カフェを持ち、当番臨床宗教師と１～２名のボランティアが活動を行います。

アミターバ、そしてカフェ・デ・モンクの出発に立ち会え、これから共に歩んでいけることに感動し、喜び、感謝しています。なんの為、誰のために私たちは臨床宗教師になろうとしたのかという初心を忘れず、目の前の人に寄り添うその心を第一として、日々スピリチュアルケアと宗教的ケアの実践と研鑽につとめます。　　（報告者：野々目月泉）

御嶽山追悼登山

2014年9月27日正午過ぎ、長野県と岐阜県の県境に位置する御嶽山が突然噴火した。御嶽山が噴火したその日は、紅葉シーズンの快晴日ということもあり、多くの登山者がいた為に、58名（行方不明5名）の方が登山中に犠牲となってしまった。

そこで、一周忌を迎える今夏、中部臨床宗教師会の有志代表である大下大圓師が発起人となり、御嶽山追悼登山計画を関係者に呼びかけ16名の有志が集った。中部臨床宗教師会からは、大下大圓有志代表・武藤隆広師・田中至道師が参加した。その他には、この追悼登山に賛同して下さった一般市民や緊急時に備え看護師の参加もあり、全体で27名（取材班含む）での追悼登山となった。

2015年8月4日、長野県木曽町三岳のロープウェイ乗り場に集結し、規制区域外の7合目・行道小屋前、8合目・女人堂小屋前での追悼典礼を目指し入山した。当日は、強い日差しがさしていたが、気温は20度程と肌寒く、山を登るにつれて足元には薄っすらと火山灰が目の前に広がっており、捜索隊のヘリコプターの姿も確認できた。険しい山道を潜り抜け、7合目・8合目の追悼箇所では、真言宗・天理教・御嶽教・浄土真宗が、それぞれ交代しながら宗教的儀礼を行った。こうした宗教宗派の垣根を超えた追悼典礼は、宗教者同士の繋がりだけでなく、参加者全員と心を一つにすることができたように感じる。

追悼登山の参加者からは以下のような感想があった。

「今回の追悼登山で、少しでも亡くなった方たちの魂が休まればと思います。また、他宗教の参拝をしたことは人と人とのつながりの大切さ、本当に大切なものは何かをしみじみと感じることができました。」工藤真理子さん（岐阜市在住）

「追悼登山は、登山して（目的地に着いて）から祈るものだと思っていた。しかし、ゆっくりと歩を進めるうちに、その一歩一歩が“祈り”につながっているということに初めて気がついた。…（中略）…生かされている私たちにできることは、犠牲になられた方々の鎮魂を祈ること、そして、一人ひとりが命を大切にし、日々感謝の気持ちを忘れず、気高く生きることだと思う。その思いを一層強くした意義深い一日であった。」丸山永二さん（高山市在住）

登山当日は、火口2キロ圏内には入山規制がかかっていたが、参加者全員が無事に下山することができた。最後に、この場をお借りして御嶽山追悼登山を計画し、さらには世話人を務めて下さった大下大圓有志代表に心より御礼を申し上げます。　　（報告者：田中至道）

新たに中部臨床宗教師会に入会したメンバーからの一言

「臨床宗教師としての今後」 坂野 大徹師

平成27年７月に、第７期臨床宗教師研修を終えることができました。本年９月まで、岩手県で復興支援の仕事をしていましたが、10月からは地元三重県に帰り、この研修で学んだことを次のように実践していきたいと思っています。

まず、ボランティア活動としては、臨床宗教師の実習でお世話になった松阪市民病院の緩和ケア病棟でボランティア登録し、月一回程度、入院患者さんとの傾聴を中心とした活動をすることと、中部臨床宗教師会に入会させていただき、カフェデモンクの活動に加わらせていただくことです。

また、師僧の住持する浄土宗梅巖寺（三重県亀山市）では、毎月17日に観音講、３か月に１回写経会、毎月数回コーラスグループ『響流沙羅（コールサラ）』という活動を行っていますが、それらに参加される檀家を中心とした皆さんと、活動を通じ交流し、宗教的ケアの機会を持ちたいと思います。

「日に日に新たに」倉田 恒雄師

東北大学での研修を終えて、臨床宗教師としての知識がまだまだ十分でないことを実感しましたので、日々勉強しています。あわせて、病院施設などで実践経験を積むために、受け入れ先を模索しています。

中部臨床宗教師会に参加される宗教者、沼口医院、賛同される方々と超宗教宗派、多種多様な職業、さまざまな経験された人々と交流を深め、情報の交換ができる場となることを楽しみにしています。愛知県内で、はじめての臨床宗教師として、また、これまで取り組んできた宗教者としての働きとともに、身の丈にあった手の届く範囲で足元をしっかりと見つめることを大切にしていきたいです。

「よろしくお願いします」 鷲尾 千賀子師

真言宗の鷲尾千賀子（龍華）と申します。滋賀県大津市の石山寺で責任役員をさせていただいております。この度、中部臨床宗教師会に参加させていただくことになりました。一年前から臨床宗教師に憧れ、今年の研修を受けさせていただきました。講義やグループワーク、実習では自分や人の心と向き合うことを学び、宗教者としての在り方を改めて考え直す貴重な時間をいただきました。この秋から種智院大学臨床密教センターのお手伝いをさせていただく予定です。未熟者ですが、自分にできることから一歩ずつ始めたいと思っておりますので、お力を貸していただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

「臨床宗教師研修を修了して」 里雄 淳意師

このたび、第７期臨床宗教師研修を修了させていただきました里雄です。研修を修了して、私自身、僧侶としての責務に怠慢であったと実感しております。

今後は、臨床宗教師としての活動を踏まえながら、自分のできること、やらなけらばならないことを具体的に行動していきたいと思っております。微力ながら中部臨床宗教師会にも参画させていただきたく存じますので、宜しくお願い申しあげます。

関西臨床宗教師会

関西でもカフェデモンクを実施する構想があり、金田住職にのれん分けのお願いをし、また看板の作成をお願いいたしました。

●2015年9月27日（日）14時～17時

■関西臨床宗教師フォーラム

会場：上智大学大阪サテライトキャンパス

主題：終末期におけるスピリチュアルケア

話者：谷山洋三（東北大学大学院文学研究科准教授）

　　大河内大博(上智大学グリーフケア研究所研究員)

コメンテーター：

松本峰哲（種智院大学人文学部教授　臨床密教センター長）

ファシリテーター：

鍋島直樹（龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授）

プログラム：①講演およびワークショップ（谷山）

「生と死に寄り添う臨床宗教師～公共性を担保した宗教者～」

②実践発表（大河内）

「医療・福祉現場における多職種連携のなかの宗教者の可能性」

③公開討論（鍋島、松本、谷山、大河内）および質疑応答

主催：関西臨床宗教師会・東北大学実践宗教学寄附講座・いのち臨床仏教者の会

協力：上智大学グリーフケア研究所・種智院大学臨床密教センター・龍谷大学実践真宗学研究科

● 2015年9月28日（月）

■フォローアップ研修

会場： 救世軍天満小隊会館 4階資料室、3階祈祷室

参加者：9名（臨床宗教師７、スーパーヴァイザー2）

内　訳：関西：羽富隆照（2期）、清水正彦（4期）、京井幹男（6期）、三品亮徹（7期）、松本宜隆（7期）、中部：鷲尾千賀子（7期）、中国：桝野統胤（4期）

SV：谷山洋三、打本弘祐

内容：オリエンテーション、活動報告

　　倫理規定解説（谷山洋三）

　　会話記録検討会

■関西臨床宗教師会総会
会場： 救世軍天満小隊会館 4階資料室
出席者：羽富、清水、京井、三品、松本（オブザーバー：谷山・桝野・鷲尾）
内容：関西臨床宗教師フォーラム2015の報告と感想
　　関西臨床宗教師会の運営と活動について
　　（カフェデモンクの実施、HP開設など）

中国地方臨床宗教師会（仮）

中国地方臨床宗教師会(仮)では立ち上げに向けての準備会を行っております。会の目標、課題の検討、互いの活動報告などを中心に進めております。発足のご報告ができますよう頑張ります。宜しくお願い致します。

●6月5日（金）
会場：下松市 専明寺　　参加人数：3名
内容：自己紹介、現在の活動、今後の予定について
●8月24日（月）
会場： 下松市 専明寺　　参加人数：3名
内容：発足に向けての話し合い、活動報告、今後の課題の検討
●次回予定　10月15日（木）
会場： 光市 普賢寺　　参加予定人数 3人

九州臨床宗教師会

九州臨床宗教師会は、会の活動としては１ヶ月に一度のペースで会合やイベントを行なっており、定期的な活動としては２ヶ月に一度、第３土曜日の午後１時３０分よりルーテル大江教会をお借りして熊本カフェ・デ・モンクを開店しております。又、レベルアップの為の研修会も適時に開催しており、メンバーの研鑽と関係を深める機会となっています。メンバーの個人的な活動としては、一般社団法人を創って活動している方、病院や老人福祉施設にお勤めの方、病院等でボランティアをしている方、それぞれのお寺や教会、職場で活躍している方等それぞれのフィールドでそれぞれの目標を持ち励んでおります。

●５月16日（土）、17日（日）
東北大学実践宗教学寄附講座フォローアップ研修 in 九州
会場：真宗大谷派熊本会館
主催：九州臨床宗教師会
共催：東北大学実践宗教学寄附講座
１日目　公開講座
テーマ：「臨床宗教師と地域連携」
講師：谷山洋三先生
参加者：28名　　臨床宗教師・サポーター　12名

地方初の臨床宗教師
フォローアップ研修
医師らと連携へ
40人参加

医療関係者、福祉関係者、臨床宗教師を目指す宗教者等が来場され、熱心に耳を傾けておられました。ワークショップでは、様々な立場の方々が連携の在り方について協議をされ、具体的な動きに繋がる話し合いがなされました。多職種がこのようにして話し合う場がまずは大切だというお声があり、このような会をまた開催してほしいというご意見も多く頂きました。
（中外日報5月17日→）

２日目 会話記録検討会
参加者：臨床宗教師6名
それぞれが会話記録の検討を通して、何故その時そのような対応をしたのか、深く自分を見つめ直すことによって、自分で気づいていなかった感情の動きに気づかせられたり、相談者の感情の動きを認識させられたり、学びの多い時間となりました。

●６月20日（土）
熊本カフェ・デ・モンク　　会場：ルーテル大江教会
参加者：約15名　　臨床宗教師・サポーター計15名
今回のカフェ・デ・モンクにはNHK熊本とKAB(熊本朝日放送）の取材があり、いつもと違う雰囲気ではありましたが、開店前から来店された方やリピーターの方もおられ、リピーターの方は前に来店された時対応した臨床宗教師を指名されて、これまでのいきさつを踏まえた上での助言を求められたり、前回男性に対応してもらったので今度は女性の臨床宗教師に話を聞いてもらいたいという方もおられ、多重な対応を求められるケースも見られました。
●６月20日（土）
KAB（熊本朝日放送）夕方のニュースにて熊本カフェ・デ・モンクの様子が紹介された。

●６月25日（木）
NHK熊本クマロク（午後６時10分）と夜のニュースで「僧侶や牧師が宗派の枠を超えて人々の悩みに寄り添う“臨床宗教師”と呼ばれる人たちの取り組みをリポート」というテーマで事務局の糸山氏を中心にカフェ・デ・モンクの様子が放映された。
●７月27日（月）　活動検討会議　　会場：ルーテル大江教会
参加者 ：臨床宗教師・サポーター６名
今後の活動に関する協議を行いました。熊本カフェ・デ・モンクは２ヶ月間に一回開催されていますが、それを待ちきれずに話を聞いてほしいという方や会場まで来れない方がおられ、対応してほしいとの要望がありましたので、２ヶ月間

の間の対応をどうするのか話し合いました。又、熊本カフェ・デ・モンクの時に来店者からカルト対策に関する相談があり、専門的な知識を身につけておく必要があるとの意見から11月１、２日にカルト対策に関する学習会を開く事等が話し合われました。

●８月22日(土)
熊本カフェ・デ・モンク　会場：ルーテル大江教会
参加者：10名　臨床宗教師６名

リピーターの方を含め10名の来店者がおられました。リピーターの方は、カフェ・デ・モンクという自分の居場所があること、話を聞いてもらえること、臨床宗教師に会えることに安心感を持って来られているように感じました。

●９月５日（土）、６日（日）
会話記録検討会
会場：真宗大谷派熊本会館
講師：伊藤文雄先生（元ルーテル神学校教授）
参加者：臨床宗教師・オブザーバー10名

伊藤文雄先生から今回の研修の目的と内容の説明が有った後、非言語のワークショップを行いました。ワークショップは、２～５ピースのパズルを持った５人のメンバーが、言葉を使わず、ゼスチャーや目配せもせずに自分の持っているパズルを他のメンバーとやり取りをしながら５人が同じ図形を作ることを目指すもので、やり取りをしながら自分や相手に湧き起こった感情を感じながら自分を客体化し、自己と相手の気持ちを把握することをこころがけて行いました。

九州臨床宗教師会会報　こんね！カフェ・デ・モンク in くまもと

メンバーそれぞれの特徴が現れ、振り返りの時間では、あの時自分はこういう気持ちだったとか、相手にこうして欲しかったとかの意見が出され、自分の捉えていた感情と相手が思っていた事との差異が鮮明になり、自分の客観視に繋がり、大いに盛り上がりました。その後は２日目に渡り会話記録の検討が行われ、それぞれに気づきを頂いた時間となりました。

（吉尾天声）

活動報告

《2015年度後期開講科目》※ 受講者数は未確定

授業名：グリーフケア論
担当者：谷山洋三
内容：悲嘆とその対応の一つとしてのグリーフケアについて基礎知識を得る

授業名：スピリチュアルケア論
担当者：谷山洋三
内容：スピリチュアルケア、宗教的ケアについて基礎知識を得る

授業名：宗教者と心のケア
担当者：高橋原
内容： 臨床宗教師の活動とその意義について

授業名：実践宗教学試論（大学院・学部共通科目）
担当者：鈴木岩弓・谷山洋三・高橋原
内容：臨床宗教師研修での講義内容を一般学生に向けて紹介するという趣旨のオムニバス講義。ゲスト講師を招いて行なう。
講師：鈴木岩弓、谷山洋三、高橋原、金田諦応、河原正典、渡邊祥文、小西達也、大村哲夫、木村敏明

《発表・講演》

5月16日 谷山洋三「臨床宗教師と地域連携」第4回臨床宗教師フォローアップ研修in熊本、東本願寺熊本会館

5月16日　高橋原「震災後の「幽霊」と宮城県の宗教者」有備館講座、大崎市岩出山公民館

5月19日　鈴木岩弓「東北大学発の「臨床宗教師」—現代日本における宗教者の役割—」WCRP日本委員会「復興に向けた宗教者円卓会議セッション　被災地における宗教者の役割・意義」

6月1日　谷山洋三「臨床宗教師の倫理」龍谷大学大学院実践真宗学研究科2015年度臨床宗教師研修東北実習、西本願寺仙台別院

6月9日　谷山洋三「スピリチュアルケア入門」薬師山病院グリーフケア委員会

6月10日　谷山洋三「スピリチュアルケア」龍谷龍谷大学大学院実践真宗学研究科2015年度臨床宗教師研修特別講義、龍谷大学大宮学舎

6月18日　鈴木岩弓「被災地にみる悲嘆と向きあう“祈りの場”」上智大学公開講座「悲嘆について学ぶ」

6月20日　谷山洋三「仏教思想における愛と寛容の精神」（教育講演）第18回日本臨床パストラルケア研究会、日本教育会館（東京）

6月21日　谷山洋三「ゆるし—スピリチュアルケアの有効性」（シンポジウム）第18回日本臨床パストラルケア研究会、日本教育会館（東京）

6月22日　鈴木岩弓「わが国宗教史における『臨床宗教師』の位置」龍谷大学大学院特別講義、龍谷大学大宮学舎清風館

6月25日　鈴木岩弓「社会から必要とされる僧侶とはー『臨床宗教師』の誕生とその展開ー」日蓮宗東京東部宗務所平成27年度教師大会並教師研修会講演会

6月29日　鈴木岩弓「現代日本社会における僧侶の位置」日蓮宗北海道四管区社会教化事業協会合同研修会

6月28日　谷山洋三「臨床宗教師の視点から見た生と死」NPO法人仙台グリーフケア研究会、仙台医師会館

6月31日　谷山洋三「電話相談における宗教協力の意義」第57回印度学宗教学会学術大会、東北大学

7月1日　高橋原「宗教者に求められる心のケア」龍谷大学大学院実践真宗学研究科特別講義、龍谷大学大宮学舎清風館

7月4日 Yozo TANIYAMA, “New Education Program of Japanese-Style Interfaith Chaplain started after the Great East Japan Earthquake and Tsunami,” Brahma Kumaris Global Retreat Centre, Oxford, UK

7月9日　鈴木岩弓「被災地に誕生する”祈り”の場」京都大学こころの未来研究センター第6回東日本大震災関連シンポジウム「こころの再生に向けて〜5年目を迎えた被災地〜」

7月14日　谷山洋三「生と死に寄り添う日〜臨床宗教師の視点から〜」石巻赤十字病院エンドオブライフケア勉強会

8月1日　谷山洋三「死を見つめる宗教性」第8期斎理蔵、丸森街まちづくりセンター

8月15日　鈴木岩弓「死者と生者の接点―戦後70年の終戦の日に考える―」平成27年 寶林寺盂蘭盆会法要

8月25日 高橋原 “Tales about ghosts of the tsunami dead and their reception in Japan’s religious landscape”, XXI World Congress of the International Association for the History of Religions (IAHR), at Erfurt University, Germany

9月2日　谷山洋三「臨床宗教師の役割日〜患者・家族・スタッフのケア〜」仙台市立病院院内勉強会

9月5日　鈴木岩弓「被災地における死者の記憶」パネル「震災と記憶―声にならない声を聴く―」日本宗教学会第74回学術大会、創価大学

9月5日　高橋原「死者の記憶と向き合う人々と宗教者の対応について」同上パネル、日本宗教学会第74回学術大会、創価大学

9月8日 谷山洋三「臨床宗教師の可能性」日本仏教学会第85回学術大会日セッション４、東京大学

9月9日　谷山洋三・鈴木聡「臨床宗教師の役割」千葉大学医学部付属病院地域医療連携部日医師のための在宅医療インテンシブコース日特別対談、千葉大学医学部

9月12日　谷山洋三「宗教者の視点から見たスピリチュアルケアの定義」日本スピリチュアルケア学会第8回学術大会日定義構築ワークショップ、高野山大学

9月13日　穀田知秋・山地ひろみ・隅陽子・金澤比呂美・原田裕子・谷山洋三「臨床スピリチュアルケア研修（PSCC18）の報告」日本スピリチュアルケア学会日本スピリチュアルケア学会第8回学術大会、高野山大学

9月13日 高橋原「臨床宗教師　誕生から これまで」 第19回日本尊厳死協会東北支部仙台大会（兼・第2回日本リビング・ウイル研究会東北地方会）、仙台市福祉プラザ「ふれあいホール」

9月15日　高橋原「幽霊を信じる人に僧侶はどう向き合うべきか？―震災被災地での報告から考える」第８回葬式仏教価値向上委員会研究会、仏教伝道センター

9月17日　鈴木岩弓「『臨床宗教師』の誕生―被災者支援から超高齢多死社会へ―」第87回北部地区国立大学病院一般財団法人運営懇話会

9月18日　谷山洋三「臨床宗教師の活動とその社会的意義」URA／知の創出センター連携企画「東北大学文系4研究科日人文・社会科学における知の創出セミナー」クワトロセミナー第9回、東北大学

9月26日 谷山洋三「看取りの現場で私たちにできること日〜死に寄り添う臨床宗教師の立場から〜」乙訓医師会公開講演会、長岡京市多世代交流ふれあいセンター

9月27日 谷山洋三「生と死に寄り添う臨床宗教師日〜公共性を担保した宗教者〜」関西臨床宗教師会フォーラム2015、上智大学大阪サテライトキャンパス

9月28日 谷山洋三「臨床宗教師倫理規約（ガイドライン）について」関西臨床宗教師会フォローアップ研修、救世軍天満小隊会館

9月29日 谷山洋三「スピリチュアリティの理解とケアの実践」GCCグリーフ・カウンセラー養成講座上級編、ちよだプラットフォームスクエア

《論文・寄稿》

鈴木岩弓「宗教とこころのケア―被災地から超高齢多死社会へ―」季刊『消防科学と情報』No月119、消防科学総合センター，pp. 27-30、2015月2月16日

鈴木岩弓（座談会）「深層ワイド　『心の相談室』と被災地の4年を語る　」（鈴木岩弓・金田諦應・川上直哉）『中外日報』第28066号、2015月3月11日

鈴木岩弓「警報音から始まったソーシャル・ムーブメント」『死の臨床』第37巻，日本死の臨床研究会，pp.28-9、2015月3月20日

鈴木岩弓（座談会）「葬送儀礼と神道文化」神道文化会座談会（鈴木岩弓・池上良正・佐野和史）『神道文化』第27号，pp. 18-54、2015月6月30日

鈴木岩弓「論説　信仰治療の世界―医療と信仰の相克―」『仙台市医師会報』No月611、pp.3-6、2015月7月1日

鈴木岩弓（座談会）「東日本大震災被災者支援と宗教者の役割ー『臨床宗教師』誕生とその現在」（鈴木岩弓・谷山洋三・高橋原・高橋悦堂）『Sogi』通巻148号，表現文化社，pp. 17-46、2015月7月10日

鈴木岩弓「先祖供養と盆」『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房，pp.183-192、2015月9月30日

谷山洋三「東日本大地震後的慰霊與弔唁」李凡編『世界與中國事務 World and China Affairs』2015年春期号、香港：世界與中國出版社、81-92. 2015年3月

谷山洋三「シンポジウム”死んだらどうなると聞かれたら” 死後のことについて考えてみるために」『死の臨床』vol.38，no.1，52-53. 2015年6月

納賀良一・谷山洋三・横山幸生・有永洋子・高田さゆり「企画委員会主催シンポジウム　真の援助者を目指して―感性を磨く―」『死の臨床』vol.38, no.1, 113-114. 2015年6月

谷山洋三「シンポジウム24　臨床宗教師とともに支える「生きかた＝逝きかた」臨床宗教師の育成」『日本在宅医学会雑誌』第17巻第1号、127. 2015年7月

谷山洋三「スピリチュアルケアとしての『祈り』」『スピリチュアルケア』（臨床パストラル教育研究センター）第68号、pp.4-5. 2015年7月

谷山洋三「9章　震災と慰霊」似田貝香門・吉原直樹編『震災と

市民２　支援とケア』東京大学出版会、197-214. 2015年8月.

「被災者はなぜ幽霊を見る？震災後の東北地方で増える心霊相談」『情報・知識事典imidas』、2015年7月10日

《企画》

谷山洋三 Dr. Carl Stauffer & Dr. Carolyn Stauffer（通訳：石原明子）, “Care and Transformation for Traumatized Communities: Roles of Religion and Spirituality”（傷ついたコミュニティのケアと葛藤変容—宗教とスピリチュアリティの役割）, The 3rd International Seminar on Spiritual and Religious Care, 2015.6.16.

《新聞報道等》

読売新聞（2015年5月8日）キャンパス発　心のケアに「臨床宗教師」

岐阜新聞（2015年5月16日）臨床宗教師が常駐へ　終末期患者の共同住宅新設 大垣の医療法人 11月、心ケアへ県内初

中日新聞（2015年5月16日）臨床宗教師、常駐ホスピス　全国初　大垣の医療法人、今秋開設

河北新報（2015年5月18日）挽歌の宛先 臨床宗教師はいま(1)

河北新報（2015年5月19日）挽歌の宛先 臨床宗教師はいま(2)

河北新報（2015年5月20日）臨床宗教師　石巻で研修開始

クリスチャントゥデイ（2015年5月20日）復興に向け、宗教者が円卓会議　重要なのは「understand」

朝日新聞熊本（2015年5月20日）臨床宗教師の公開講座に40人

河北新報（2015年5月21日）　臨床宗教師はいま(3)

【TV】ミヤギテレビ「OH!バンデス」（2015年5月21日）臨床宗教師研修について

河北新報（2015年5月22日）　臨床宗教師はいま(4)

河北新報（2015年5月23日）　臨床宗教師はいま(5)

毎日新聞岐阜（2015年5月25日）トーク＆トーク　医療法人徳養会「沼口医院」院長・沼口諭さん

朝日新聞（2015年5月25日）大阪夕刊 トーホグ弁も様々で

仙台経済界特別増刊号『仙台のプロジェクト100』（2015年6月1日）　臨床宗教師 命の現場で求められる人に寄り添う宗教者

朝日新聞岐阜（2015年6月1日）臨床宗教師 田中至道さん(27) 在宅患者に寄り添う

産経新聞（2015年6月4日）龍谷大学臨床宗教師研修 in南三陸

産経新聞京都（2015年6月11日）臨床宗教師「一緒に地獄に落ちる存在」

中外日報（2015年6月17日）地方初の臨床宗教師フォローアップ研修 九州

産経新聞京都（2015年6月18日）龍谷大学大宮学舎で特別講義　臨床宗教師雇用の院長講演

中外日報（2015年6月19日）女性の声　臨床宗教師として（真宗大谷派坊守）

【TV】熊本朝日放送「KABニュース」（2015年6月20日）くまもとカフェ・デ・モンクについて

産経新聞京都（2015年6月22日）　自殺対策に臨床宗教師 京都府 カフェで傾聴活動 龍谷大と提携

毎日新聞秋田（2015年6月23日）　男鹿の大龍寺住職　三浦賢翁さん

産経新聞京都（2015年6月23日）「民間信仰で救われる」「臨床宗教師」養成の特別講義　龍谷大が一般公開　東北大鈴木教授が講演

【TV】NHK熊本「クマロク！」（2015年6月25日）僧侶や牧師が、宗派の枠を超えて、人々の悩みに寄り添う“臨床宗教師”と呼ばれる人たちの取り組みをリポート

毎日新聞京都（2015年6月25日）　臨床宗教師：自殺防止対策に 龍谷大に府が委託　遺族や悩み抱える人「解決の糸口に」

中外日報（2015年7月1日）関東臨床宗教師会

産経新聞京都（2015年7月2日）「死生観と信仰が裏付け」龍谷大「臨床宗教師」研修　東北大学院准教授が講演

読売新聞宮城（2015年7月2日）宗派を超えて心のケア　晶林寺副住職松山宏成さん

岩手日報（2015年7月4日）臨床宗教師　心をケア 一関・川崎の後藤さん

河北新報夕刊（2015年7月14日）週刊きみどり　かかりつけのお坊さん

毎日新聞西部夕刊（2015年6月25日）憂楽帳：挑戦　くまもとカフェ・デ・モンク

河北新報（2015年7月18日）　＜挽歌の宛先＞(59)前向く力取り戻す場

河北新報（2015年7月19日）　＜挽歌の宛先＞(60)あなたのままでいい

河北新報（2015年7月20日）＜挽歌の宛先＞(61)信心超えて人つなぐ

中外日報（2015年7月29日）関東臨床宗教師会

中外日報（2015年7月29日）2　「臨床宗教」の新地平　高野山大が公開講座

毎日新聞大阪（2015年7月31日）くらしナビ・カルチャー:医療療現場に向き合う仏教者　「西本願寺 医師の会」発足、浄土真宗本願寺派の取り組み

『SOGI』148号（2015年7月）特集　東日本大震災被災者支援と宗教者の役割—「臨床宗教師」誕生とその現在

河北新報（2015年8月2日）一関の僧侶・臨床宗教師 後藤泰彦さん

中外日報（2015年9月2日）高野山大、東京で講座開講

中外日報（2015年9月2日）　東京ビハーラ　臨床宗教師を迎えがん患者の語らい

中外日報（2015年9月2日）　関東臨床宗教師会　今後の活動を協議

河北新報（2015年9月14日）＜祈りと震災＞臨床宗教師の役割探る 日本尊厳死協会東北支部仙台大会

毎日新聞（2015年9月14日）「臨床宗教師」シンポ開く　仙台被災者ケア、体験語る

【TV】ABC朝日放送「キャスト」（2015年9月18日）心に寄り添う“臨床宗教師” 若き僧侶 挑戦の日々

仏教タイムス（2015年9月10日）高野山大学　臨床宗教教養講座が開講

仏教タイムス（2015年9月10日）日本宗教学会　「震災と記憶」でパネル討論 宗教者のケア活動を総括

産経新聞京都（2015年9月27日）臨床宗教師を養成　准教授招き講演会 乙訓医師会

寄附者

東北大学文学研究科実践宗教学寄附講座は宗教界など各方面からの寄附金によって維持運営されています。寄附者の方々をここに記し感謝申し上げます。

日 本 基 督 教 団
南西ドイツ宣教会
(EMS: Evangelical Mission in Solidarity)
宮城県宗教法人連絡協議会
真宗教団連合
日本ナザレン教団
宗教法人みんなの寺
融通念佛宗音羽山観音寺
浄土真宗本願寺派真覚寺
真宗大谷派常念寺
天台真盛宗新光寺
天台真盛宗西念寺
融通念佛宗西方寺
曹洞宗島田地蔵寺
真言宗智山派大聖寺
日蓮宗実相寺
日蓮宗妙興寺
秩父神社
神習教
念法眞教
日蓮宗立像寺
曹洞宗崇禅寺
聖観音宗浅草寺
日蓮宗法音寺
曹洞宗洞林寺
その他個人の方々
公益財団法人世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会
立正佼成会一食平和基金
真如苑
公益財団法人 新日本宗教団体連合会
一般財団法人　ありがとうインターナショナル
日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室
財団法人東北ディアコニア
特定非営利活動法人神道国際学会
特定非営利活動法人世界開発協力機構

当講座は、全日本仏教会の「推薦団体」、日本宗教連盟の「後援団体」として認定を受けています。
ご寄附のお申し込みにつきましては下記までお問い合わせください。なお、寄附金には法人税法・所得税法による税制上の優遇措置があります。

東北大学文学研究科内実践宗教学寄附講座
TEL: 022-795-3831(FAX兼)
E-mail: j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp

編集後記

ニュースレター第８号には、これまでになく多数の方々のご寄稿をいただきました。ご協力に感謝申し上げます。医療・福祉だけが臨床宗教師のフィールドだろうかという秋田さんのご提言、スピリチュアルケアの定義についての葛西さんのまとめ、いずれも、重要なテーマであり、立ち止まって考えなければならないテーマだと思います。大下さんのご寄稿、大島さんのご報告は臨床宗教師をめぐる最新の動向を反映したものです。目の前の相手に対する全身全霊での傾聴とともに、さまざまな職種の人々と連携し、言葉を交わしていかなければならない臨床宗教師の方々にはゆっくりと目を通していただきたいと考えております。

（た）

実践宗教学寄附講座

鈴木岩弓　実践宗教学寄附講座教授（兼任）
谷山洋三　実践宗教学寄附講座准教授
高橋　原　実践宗教学寄附講座准教授

※従来この欄に記載しておりました実践宗教学寄附講座運営委員会は、心の相談室の中に置かれていましたが、同相談室の改組に伴い、2015年9月7日をもって解消しました。かわって、臨床宗教師研修の運営に関して倫理綱領に関わる問題などが生じた場合に備えて、必要に応じて招集される「諮問委員会」が設置されました。この委員会には旧運営委員のメンバーが委嘱されました。

980-8576
宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学文学研究科内
実践宗教学寄附講座
022-795-3831(T/F)
j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp
http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/

東北大学

各地臨床宗教師会連絡先
北海道東北　ht.rinshushikai@gmail.com（事務局）
関東　catfish77@mopera.net（遠山玄秀）
中部　tanaka.amitabha@gmail.com（田中至道）
関西　2kopon@gmail.com（吉田敬一）
九州　ytennsei@yahoo.co.jp （吉尾天声）

東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター第8号
編集・発行　東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座
2015年11月1日（第1刷）
（このニュースレターは上記ホームページからも閲覧できます。）